

北海道と東北地方の地名関連について

——地形地名〈ひら〉に関する研究¹⁾——

藤 島 範 孝

1

北海道と東北地方の古い関鍵関係は既に、考古学²⁾ や歴史学³⁾ 其の他の分野⁴⁾ から、勿論地名学の地名語源類似追求の立場でも指摘されていて、一般に Ainu 語の〈pét〉や〈náy〉は〈別〉と〈内〉の漢語の仮借で表現され両地方に分布し、同各語源が発展定着したものとみなされている。金田一京助はその〈北奥地名考〉⁵⁾ の中で、〈pét〉が東北地方で〈別〉・〈辺地〉として名残したものと説いている。〈今別〉・〈原別〉・〈瀬辺地〉・〈野辺地〉・〈苦米地〉・〈尾別〉・〈馬淵〉・〈字部〉・〈仁別〉・〈波字志別〉・〈覚鼈〉等を明譬として掲げている。〈náy〉は〈奥内〉・〈笹内〉・〈江流間内〉・〈シオヘナイ〉・〈入内〉・〈田子内〉・〈猿半内〉・〈沼宮内〉・〈弁慶内〉・〈梅内〉・〈小津久内〉・〈宇内〉等東北各地に余喘としてみると説いている。山田秀三はその〈アイヌ語地名考〉⁶⁾ で、⁷⁾ 東北地方に残在する日本語らしくない地名を総合してみると、〈内〉の地名が圧倒的⁷⁾ に多く、又、〈別〉の系統の地名や、その他北海道に多く散在する〈ウシ〉⁸⁾ や〈オマイ〉⁹⁾ が、東北地方の地名となって、或は地名の語尾となって分布している。個々の地名が似ているだけでなく、地名全体の形態が酷似しているのである。東北地方と北海道に、同系語族がいて、これらの地名を残したと考える外に解釈がつかない⁸⁾。と謂っている。三浦鉄郎は〈秋田の地名〉¹⁰⁾ で、〈花輪〉は Ainu

北海道と東北地方の地名関連について

語の <pána-wa>¹¹⁾ であり、<尾去沢> は <'o-sari> 即ち川尻の <'o> と <ザレの類語の sari> と <沢>¹²⁾ から構成されたものとみている。<柴内>¹³⁾ の <内>、<毛馬内> の <kéma-náy>¹⁴⁾、<赤石> の <赤>¹⁵⁾、<達子森> の <達子> は <tápu-cópu>¹⁶⁾、<綴子> は <肉入籠>¹⁷⁾、<目名瀉> の <目名>¹⁸⁾、<戸賀> の <戸> は <tó>¹⁹⁾ であると謂う。<山内> が <sán-náy>²⁰⁾、<仁別> の <ní-pét>²¹⁾、<皿見内> の <内>、<新波> の <á-ra-pa>²²⁾、<白岩> の <shírar>²³⁾、<生保内> の <'o-pón-náy>²⁴⁾、<樽見内> の <'ot-ru-mín-náy>²⁵⁾、<西馬音内> は <níshí-mo-náy>²⁶⁾ 等があるとしている。柿崎隆興²⁷⁾ は <床舞> が <toko-'omay>²⁸⁾、<赤袴>²⁹⁾、<払体>³⁰⁾、<鶉巢>³¹⁾、<太倉>³²⁾、<鹿内>³³⁾ 等が Ainu 語と関連あるものとしている。又、南外村誌によれば³⁴⁾、<平形> の <平>³⁵⁾、<西板戸> の <戸>³⁶⁾、<鞆田> の <鞆>³⁷⁾、<赤平> の <赤平>³⁸⁾、<大平> の <平>³⁹⁾、<谷地> の <谷地>⁴⁰⁾、<猿倉沢> の <猿>⁴¹⁾、<赤畑> の <赤>⁴²⁾ 等 Ainu 語に語源があるものとしている。この他 Ainu 語が東北地方に余喘として残在したものと指摘されている地名を掲げてみると次のようなものがある。

<猿ヶ瀬>⁴³⁾ <室岱>⁴⁴⁾ <谷地>⁴⁵⁾ <熊ノ岱>⁴⁶⁾ <比八田> <天内> <田床内> <丑首頭> <飛根> <浅内> <板見内> <戸地谷>⁴⁷⁾ <狙半内>⁴⁸⁾ <中石> <戸賀>⁴⁹⁾ <チゴキ崎>⁵⁰⁾ <浅見内>⁵¹⁾ <床舞>⁵²⁾ <田舎館>⁵³⁾ <猿間> <小猿部> <尾去沢>⁵⁴⁾ <尾別> <乙辺地> <尾辺地> <薄市> <飯詰> <和泉> <今泉>⁵⁹⁾ <田子> <来満> <佐羽内>⁵⁶⁾ <薄井> <横薮>⁹⁷⁾ <梵珠山>⁵⁸⁾ <目時> <上目時>⁵⁹⁾ <相内>⁶⁰⁾ <藍内> <大助>⁶¹⁾ <鳥谷> <赤坂> <官代> <虎渡> <鍋倉> <名久井> <剣吉> <作和> <丹内> <蛭懐> <鳥舌内> <母> <田子> <道地>⁶²⁾ <今別>⁶³⁾ <大泊>⁶⁴⁾ <褰月>⁶⁵⁾ <奥平部>⁶⁶⁾ <綱不知>⁶⁷⁾ <大間>⁶⁸⁾ <猿ヶ

北海道と東北地方の地名関連について

石川> <飯豊> <土淵> <柏崎> <厚楽> <山崎> <野崎> <西内> <枋内> <琴畑> <恩徳> <立丸> <遠野>⁶⁹⁾ <鶉ノ木> <姉体> <阿久戸> <谷地中>⁷⁰⁾ <栗駒岳> <須川> <刈和野> <五串> <阿久利川> <達谷> <萩庄> <赤萩> <達古袋> <市野々> <保呂羽> <忍骨> <鬼死骸> <配志和> <平泉> <衣川> <戸河内> <東稲山> <北上> <舞草> <烏兎ヶ森> <舞石> <相川> <草沢> <番台> <石蔵山> <最明寺> <蓮花谷> <薄衣> <畑ノ沢> <平沢> <富沢> <日形> <有壁> <有賀> <カクベツ城趾> <花泉> <黄海> <折壁> <鬼首山> <小梨> <奥玉> <摺沢> <猿沢> <渋民> <鳥海>⁷¹⁾ 等の地名が Ainu 語源説と繋がっているものとみられている。

この他の国誌，郡誌，市誌，町村誌史 其の他の郷土史史料を通して⁷²⁾，Ainu 語或は夷語，土語と指摘するものは1400語を超えている。重複するもの，疑わしいがと前書の有るものを青森・秋田・岩手の三行政区域内ですら15,000を超えようとしている⁷³⁾。これらの事実を否定して Ainu 語が東北地方に何等の影響を齎らす事が無かったとは謂えない。北海道と東北地方の地名の是酷似性から，東北地方にも Ainu 語系の民族が古くは定棲して居たと推測して間違いがないであろう。仮に考古学及び歴史学・民族学の立場で決定的な根拠がないとしても，地名学の分野からは酷似性を否定する論拠を持つことが出来ないでいる。Ainu 語研究者の多くは，単に地名の酷似を指摘する事で，Ainu 民族の移動，言語の混成まで拡大しなかった理由は，是決定的な根拠に踏み迷う危惧を抱き其の研究が手堅いと評される程遅々として展開がなかった事に繋がるものと推定される⁷⁴⁾。確に地名起源の年代学的な発達構造を放棄して単に類似酷似のみで同系民族がいたと謂う憶説は決して学説になり得るものではない。

北海道と東北地方の地名関連について

<註>

- 1) 日本地理学会予稿集3。日本地理学会・人文地理学会共催昭48和年大会<於
広島大学>報告に加筆したものである。
- 2) a) 北海道の縄文早期・前期は、ただちに東北地方の編年とはならない。ポ
イント<尖底式土器>が住吉町式に編年されている程度である。つづい
て、椴川式が東北地方の円筒土器下層aに、サイベⅡ式が円筒土器下層
c式、勝山館Ⅱ式が円筒式土器下層d式に対比するといわれている。<
松崎岩穂・渡辺兼庸；北海道椴川，十兵衛沢・勝山館遺跡・考古学雑誌
44，>児玉作左衛門；サイベ沢遺跡，市立函館博物館><名取武光・峰
山巖；入江貝塚，北方文化研究報告13> <名取武光・峰山巖；茶呑遺
跡，北方文化研究報告18> <室蘭市；室蘭遺跡> <名取武光著作集
I，アイヌと考古学，北海道出版企画センター> 等を参考，又，<江
坂輝弥；青森県下北郡東通村尻屋物見台遺蹟調査概報，考古学雑誌27>
に拠ると物見台式は明神裏Ⅲ式と併行し住吉町下層式に対比されるもの
とみている。羽状縄文土器の桂島式 <林謙作；宮城県棄島貝塚出土の
前期縄文式土器群，考古学雑誌46-3> や原形と考えられるニツ木式が
北海道まで波及したものとみている。<児玉作左衛門・大塚利；函館市
春日町出土の遺物について，北方文化研究報告9>，ともかく，従来比
較研究が充分でなく係争議論はあるとしても，関連性を否定するまでに
至っていない。
- b) 縄文中期になると，やや編年対比が出来，勝山館Ⅲ式が円筒土器上層
a，十兵衛沢Ⅱ式が円筒土器上層bになる <松崎岩穂，渡辺兼庸前掲
書>
- c) 縄文後記・晩期で特に対比されるものは，ワシベツ遺跡と十腰内Ⅰ式
<前掲・室蘭遺跡>，手稲式土器と宝ヶ峰式 <大場利夫・石川徹；手
稲遺跡，手稲町称名寺式の分布 <吉田義昭；門前貝塚> <名取武光
・峰山巖；若生貝塚，北方文化研究報告33> などがある。晩期になる
と北海道に東北地方で造られたとみられる亀ヶ岡式土器が発見されてい
る。<千代肇；北海道の続縄文文化と編年について，北海道考古学1>
- d) 続縄文文化では本輪西上層土器と田舎館の土器 <山内清男；日本遠古
の文化，ドルメン>，江別式の <苫前・浜益・フゴッペ・美国・大曲
・本輪西・神恵内・茶津・発足・兜野・青苗・常丹・小金沢・尾白内・
桜町・鳴川・見晴・館浜> と青森 <尻屋・目時> 秋田の <曙岱
>・岩手の <軽米・釜沢> 宮城の <大泉> 山形の <寒河江・
山寺> 分布や北大式の <神恵内・フゴッペ・本輪西・小金沢・桜町

北海道と東北地方の地名関連について

＞ と青森の 〈浜尻屋の分布〉, 擦文式の 〈苫前・江別・フゴッペ・美国・神恵内・発足・茶津・植苗・西舎・青苗・五厘沢・法華沢・汐吹・尾白内〉 と青森の 〈ムシリ・割石・福浦・丸雙伯・稲崎・泊・赤坂〉 や岩手 〈軽米〉 宮城の 〈西大崎〉 の分布から文化勢力が一時的であったろうが本州に拡大されていたものとみられている。〈千代肇；北海道の続縄文期に関する研究と課題, 日本考古学協会研究発表〉 〈千代肇；弥生式文化の北方伝播とそれをめぐる課題, 考古学研究9-1〉, 〈伊藤信男；東北北部の弥生式土器, 文化24-1〉 〈山内清男；石器時代にも稲あり, 人類学雑誌40-5〉等。

e) この他 〈燕形銚頭〉 が, アイヌ・エスキモー・アリュート・チュクチ・北米インディアンまで広がり有力漁具とされている。〈加東孝；縄文文化, 東北の歴史〉

- 3) 前期及中期古墳時代の両地方の関係は詳らかでない。ただ, 阿倍比羅夫の遠征にまつわる古墳群 〈河野広道；苫小牧古代史〉 だとすると, 後期古墳時代には何等かの関係があったものとみられている。当時蝦夷と呼称された人々が日本人と全くの異種とは考え難いが, 地域的隣接性を勘案すれば, 今日のアイヌの祖先と関係の深い人々が北部に混在していたとみてよい。〈新野直吉；古代東北の開拓〉 〈清水潤三；蝦夷の文化とその種族, 史学25の3〉, 〈氏家和典；古代の蝦夷と農耕文化, 古文化7の4〉 〈高橋富雄；蝦夷〉, この他記紀伝承からくる幾多の潤色を差引いても, 北海道と東北の両地方は一時的にでも文化的交流があったとみるべきである。〈津田左右；吉日本古典の研究〉 〈本居宣長；古事記伝〉 〈上田正昭；日本武尊〉 高橋富雄前掲書〉 など。
- 4) 聖徳太子の絵伝がそれである。〈鳥居竜蔵；聖徳太子絵伝蝦夷降伏の絵について, アイヌ研究〉 〈高倉新一郎；聖徳太子伝絵巻に現われた蝦夷風俗画について, 北方文化研究報告第8輯〉 〈越崎宗一；アイヌ絵志〉 〈桜井清彦；聖徳太子絵伝のアイヌ・アイヌ秘史〉 〈児玉作左衛門；聖徳太子絵伝中の所謂蝦夷図, 先史学史〉 などにもみられる。降って 〈チャシ〉 〈柵〉 などから 〈諏訪大明神絵詞〉 などに関連がみられる。〈奥山亮；北海道史概説〉
- 5) 〈金田一京助；北奥地名考, 言語の研究・河出〉
- 6) 〈山田秀三；東北と北海道のアイヌ語地名考・楡〉
- 7) 「圧倒的」と表現するが地名の残存量から必ずしも圧倒的であるとはいえない。数量的比較しても和語の方が優っている。
- 8) 〈ウシ〉 とは 〈'ush〉 或は 〈'ushi〉 と表らわし 〈……ある〉 或は 〈

北海道と東北地方の地名関連について

……あるところ> と一般に訳している。

- 9) <オマイ> は <'omay> で <ウシ> と同様に <……ある> と訳している。
- 10) <三浦鉄郎；地名のはなし—秋田の地名，三光堂>
- 11) <pána> は <上> で，<wa> は <……より> と解しているが，<pána> は down-river で川でいえば川下のことである。地方によっては <pét-pánake>，<pét-pút> などともいう。川上は <péna> であるから誤解しているものと思われる。川上とは水源地 <pézetoko> から変化したもので，決して <pána> とはいわない。<pe> は頭を指す語注をもつ。<wa> は確に <……して> <……より> <……から> <……よ> と訳すことが出来るが <pána-wa> とすると川下からとなって <何が？川下から> なのか不明である。漢語の <花輪> <花環> などの説明も併せて考えてみないと一方的断定はむつかしいものと思われる。
- 12) Ainu 語の <'o> は <肛門> 或は <女陰> を指し，転じて <口> <尻> <川口> <川尻> を指す。若し <'o> で尾去沢が始るなら <'o-sar> で <葦原のある川尻> とみる。伊達市長和の旧名が <'o-sar> で長流 <おさる> と書いた。斜里や沙流も <sar> で例が多い。しかし，これも高瀬吉五郎の説を加味したものでないと困る。一般に Ainu 語プラス和語の地名には疑問なものが少くないからである。
- 13) <柴> が和語で <内> は Ainu 語だという所謂プラス Ainu 語の典型的なもので，疑問視するものの一つである。<柴> を <súppa> だとすると <力を入れる> となり注味がよく解らなくなる。網走が <cipo-náy> の原名があるのと同じで転訛が激しいものは，今から探ぐるとは至難である。
- 14) <kema-nay> の <kema> は <脚> <足> で漁具と断定することは出来ない。従って <kema-náy> は <脚まで入る川> の意識ではないかと推定することが出来る。拙稿の <増毛町地名解—雄冬の項> で，類似の <kema> について次のような解釈を下してみた。①<kema-fure> はケマフレ鳥（脚の赤い鳥）。②<kema-fure> 赤岩（底が鉄分含み赤色を呈す岩）<松浦武四郎の西蝦夷日誌による>。③<kema-fure> 附子のあるところ等説3で③を採ったが，<毛馬内> についても充分考慮してみる必要性があるものと思われる。
- 15) Ainu 語の <アカ> は尾根，岬，山稜，崖としているのは <áka> という表現があるものと決めてかかっているようだが，本来 <wakka> に相当し，稚内・止若などの地名が示すように <冷水> <飲水> のあるところなのである。<アカ> は梵語の闍伽と関連があるといわれているし，漁舟

北海道と東北地方の地名関連について

に入っている〈アカ水〉とも関連するとみる。音韻的には和語の〈湧く〉とも関係して来るとみる。拙稿；〈北海道の地名分類2〉及び〈北海道の地名分類3〉を参照ありたい。

- 16) 〈tap-cop〉 或は 〈tapu-kopu〉 で孤立丘を指す。従って〈達子森〉とは内容的に一致はする。但し〈子〉が〈こ〉と謂っていたか多少疑問はある。北海道には〈達布〉〈達布山〉などの地名となって数多く例がある。
- 17) 日本書紀にある。齋明天皇5年3月〈……船一隻に五色の綵帛を飾りかの地の神を祭った。肉入籠（ししりこ）についたとき、問菟の蝦夷胆鹿島・菟穂名の二人が後方羊蹄を政所にすべきだと進言した。〉の肉入籠である。反論もあるが省く。綴子郷土読本に拠ると〈シシリコ→ツツレコ〉のことでありと断定している。
- 18) 〈mena〉 は枝川のことである。〈アイヌ語地名解—更科源蔵；北〉であるが、〈ménas〉 という表現も考えてみなければなるまい。地名発祥地から溯って考慮する必要がある。
- 19) 拙稿；〈秋田の地名研究—危険なアイヌ語説—，秋田魁〉
- 20) 〈san〉 は下る。〈náy〉 は川で、山から海へ急に下る川を指すことが多い。積丹半島の〈柵内〉は永田方正の〈蝦夷語地名解〉に「流レ下ル川」となっているが、旧記に〈サネナイ〉とあり、更科地名解では意味がはっきりしないとしている。稚内にも〈柵内〉があり、〈下ル川〉としている。
- 21) 〈ní-pét〉 の〈ní〉 は木・棒・薪で〈鏡味完二；日本の地名，角川〉で〈森の意〉とあるが、間違いである。Ainu 語地名の〈ní〉 は〈寄木〉が多く、木・棒・薪に流用されている。拙稿；〈増毛町の地名解—歩古丹の項〉で説いてある。
- 22) 〈アラパ〉とは Ainu 語の〈水によって運搬する物〉というが、具体性がないばかりか当筈の表現もみつからない。〈アラパ〉を Ainu 語としているのは大正寺村郷土史誌の詳細については不明である。発音からすると〈'ara-pa〉で〈家の頭〉となる。しかし、これに類似の地名はない。従ってこの地名の解釈を急いではならない。
- 23) 〈shírar〉 が〈白岩〉に転じたというのが疑問が多い。ただ〈シララ〉を〈白岩〉と断定するのは危険である。拙稿；〈北海道の地名分類，駒大紀要7〉に〈shírar〉 及び〈sírar〉 について論述してある。〈磯〉のことで、拙稿；〈海岸地名，人文地理学会研究報告（昭和47年）〉で、内陸部では殆んど用いられない表現であったことを説いてある。藤原愛泉の先住民族

史の断定は必ずしも当たっていない。

- 24) <田口秀吉；生保内の歩み> に <オボンナイ> (深く小さな沢，霜の多い沢)，<オボロナイ> (川尻の沢)，<オボフナイ> (川尻の木の湧きあがる沢) などの訳をかかげているが，<'o-póro-náy> か <'o-pon-náy> が一般的である。
- 25) <菅江直澄；雪の出羽路> に正しくは <オタルミンナイ> だが，<タルミンナイ> としか発音しないとある。<オタ> は <'ot> か <ル> は <ru> か，<ミン> は <min>，<ナイ> は <náy> か，似た地名に小樽がある <'ot-ru-'oma-náy> で，今日の <'ota-ne> 浜の近くが地名発祥地である。地形をみて比較せねばならぬものの一つであろう。
- 26) <柿崎隆興；郷土のしおり> に <nise> <mo> <náy> が語源であるとしている。即ち <深い断崖を流れる支谷> の義としている。<nise-mo-náy> の解釈としては至当だが，<ニセコ> などと地形比較せねば断定は出来ないようである。<柿崎隆興；郷土の地名> で，<小野純治；秋田史壇第二輯> や <奈良環之助；朝日ジャーナル・昭和41.8.21>・茂木久栄・板橋源などの説を採らないとっていることには賛成である。殊に <ni> を雲とすることは疑問が多い。同韻として和語の <nizi> 虹を挙げることが出来るが，地名としては類例がないので採るとすると勇気のいることである。又，雲は <nis> というより <niskur> として表現されることが多いと伝えられている。東北地方と特に関係が深いと思われる八雲や幌別の方言は <niskur> が一般的で，<nis> といえは十勝・北見の方言である。従って，西馬音内の <西> は <niskur> の略としか受取れない。<nis> だとすると道東のものと似ている事になり飛地名となる。これらの事から <nise> は <絶壁> とするが至当であろう。
- 27) <柿崎隆興；郷土の地名> の約半数は筆者の Ainu 語説に解答したもので，その労作には深謝に堪えない。
- 28) 茂木久栄は <toko-'omay> を採用している。初山別の旧名を <登駒内> <tokom-'oma-náy> 或は <tótce-'oma-náy> といいつて，<tokom> は瘤のことである。松浦竹四郎の松浦日誌にも <瘤山のこと> と述べてある。<'oma> は (……ある) だから，瘤山のある沢となる。或は <床舞> に忠実であるとすれば <tokóm-i> かも知れない。瘤山のある所となる。
- 29) <アカ> は 15) のように山陵と訳すのは行きすぎと思われる。知里真志保の説というが，用語例が少ないだけでなく，最近になって <wákka> 説に覆転したものが多い。Ainu 語源説で当筈めてみると <wákka-kama> で <岩の傍から湧き出る飲料水> が妥当のような気がする。<wákka-kama>

北海道と東北地方の地名関連について

- > → <wákka-ma> → <'akka-ba-kama> と転訛したものであろう。
しかし和語でも意が通ぶるので検討してみる必要がある。
- 30) <払体> の語源は Ainu 語の <pón-táy> から来ているとしている。<táy> は <袋> <岱> <体> などと同じ森の意から転じたものであろうと推定している。
- 31) <鶺鴒> は <'u-nu-shikar> だとするが、多少の無理があるものと思われる。石狩の <shikar> で曲っている川と同じであるのだといわれる。和語でも使用されるので同時に解釈する必要がある。
- 32) <太倉> は <táy-cura> で絶壁のある山としているが、これも疑問がないわけではない。
- 33) <sihkar-náy> で、蛇行を指している。石狩川のような大河は <náy> を付けていないので、河川としては小規模なものなのであろう。
- 34) 南外村教育委員会；南外村誌・南外村地名考資料，昭和47.3刊
- 35) <平> は後述するが、<pira> で崖であろうとするが、<形>の方が不明である。こういう組合せは抱合語であるからいいのだけでは済まない問題をふくんでいる。
- 36) <戸> は <tó> で、沼・湖のことである。
- 37) <鞆> は山麓の <shir> 一般に尻と表現している。<尻屋岬> がそれである。
- 38) <wákka-píra> の変化したもの，15) 及び 29) 参照。
- 39) 35) 参照。
- 40) <yachi> は野地・谷地で数多い。拙稿；<増毛町史，地名解，別荘の項> に <yachi> の詳細について述べてある。参照を乞う。
- 41) <sar>，12) を参照ありたい。
- 42) 29) 及び 15) 参照ありたい。<赤> を山稜とする説を採っている。赤平の市赤平も当初は <áka-píra> で山稜の末端の説を採っていたが，地名としては不自然であるとして <wákka-píra> が採られている。赤木三兵によれば亀田市の赤川も <wákka-pe> であるとしている。奥尻の赤石は <fure-shuma> の意味であり，赤井川も <fure-pét> の意識としている。
- 43) <sar-ka-sé> とみる。
- 44) <室岱> の <岱> が <táy> とみる。
- 45) <谷地> は 40) 参照，林木；能代図書館よりの地名解答による。
- 46) <kuma-no-táy> とみている。三浦誠；<加秀祁一上巻>，粕毛村郷土史編纂会による。
- 47) 草薙陸奥磨；仙北村共民館よりの調査解答による。

北海道と東北地方の地名関連について

- 48) 増田郷土史498～499 pによる。
- 49) 男鹿市教育委員会；泉明の調査解答による。
- 50) 八森町教育委員会の調査による〈古老のいい伝え〉をまとめたものと謂う。
- 51) 五城目町社会教育課調査の〈町名由来〉に拠る。
- 52) 森田村作成〈西津軽郡史〉及び〈石神遺跡〉資料による。
- 53) 田舎館村郷土誌研究会の〈館城文化・田舎館村城趾考資料集〉などによる。
- 54) 大館市史編纂室資料よりの調査解答による。
- 55) 中里町史編纂室；〈中里町史66～93 p〉
- 56) 用子町誌編纂委員会；〈田子町誌〉
- 57) 林正雄；〈梅沢村郷土史〉，〈鶴田村誌〉などより。
- 58) 浪岡町教育委員会の調査資料による。
- 59) 佐藤嘉悦；三戸城温故館の調査回答による。
- 60) 市浦村教育委員会の調査解答による。
- 61) 相馬村，山田・中沢秀義の調査回答による。
- 62) 名川町史；〈アイヌの地名〉より。
- 63) 今別町史 p 1による。
- 64) 東奥日報の〈地名辞典〉による。
- 65) 同上〈地名辞典〉から。
- 66) 今別町史 p 24による。
- 67) 今別町史，東奥日報〈地名辞典〉及び〈みちのく双書—第15集〉などによる。
- 68) 大間教育委員会，古川一夫の調査回答による。
- 69) 遠野市教育委員会よりの調査回答資料による。
- 70) 佐々木亮二郎；水沢市社会教育委員会よりの調査回答による。
- 71) 藤田相之助；〈日本先住民族史〉，滝口千里〈この地方のアイヌ語地名〉などによる。
- 72) 夷語の地名を指摘している主な史誌類を列記すると次のようなものがある。
〈寛文印知・集続々群書類従 第9,539〉 〈国郡名字考・新井白石・新井白石全集〉 〈国名風土記・栗田寛耕・釈日本記・仙覚万葉集抄〉 〈古風土記逸文；山県大弐の著書といわる〉 〈主図合結記；深井彪撰〉 〈諸国廃城考；洛夾鐘散入撰〉 諸国名義考；斎藤彦磨撰〉 〈日本地誌提要；内務省地理寮地課・明治7年〉 〈奥州五十四郡考；新井白石・新井白石全集〉 〈奥羽観蹟聞老志；佐久間義和撰〉 〈相生集；大鐘義鳴撰・岩磐史料叢書〉 〈磐城志；鍋田昌山撰・岩磐史料叢書（一部）〉 〈磐城史料；大須賀筠軒撰，明治45〉 〈鹿角志；内藤十湾撰，明治40〉 〈烏城志；安田如鳩撰・大正2，

北海道と東北地方の地名関連について

黒石案内ともいう〉〈旧蹟遺聞；三輪秀福，阪牛助丁，梅内祐訓共撰〉〈泥内風土記；高橋子績，南部叢書〉〈新撰陸奥国誌；岸俊武撰，明治9〉〈新撰陸奥風土記；保田光則撰，万延元年の稿，大正2〉〈津軽一統志；相坂則武著〉〈平泉旧跡志；相原友直撰，仙台叢書所収，宝暦10〉〈平泉志；高平真藤撰，明治21〉〈封内郷村史；大卷秀詮撰，寛政9〉〈封内名蹟志；高橋以敬撰，仙台叢書，寛保3〉〈向鶴；中里忠香著，明治23〉〈陸奥部郷考；関元竜撰，仙台叢書所収，文政7〉〈盛岡砂子；星川正甫撰，南部叢書所収，明治7〉〈秋田昔物語；那珂通実著，寛永年間〉〈大館旧記；不明，大館叢書，年代不詳〉〈象潟志；中松千代松撰，明治38〉〈荘内物語；小寺正撰，享保9〉〈出羽国風土記；荒井太四郎撰，明治17〉〈出羽国風土略記；進藤重記撰，宝暦12〉〈奥羽史料；佐沢広胖著〉〈奥羽沿革史論；日本歴史地理学会〉〈東北開発史；竹内運平著〉〈東北史の新研究；吉田良一還暦記念〉〈青森県史〉〈青森郷土史〉〈青森県通史；竹内運平著〉〈津軽藩史〉〈青森県叢書〉〈新釈青森県史；尾崎竹四郎著〉〈弘前市誌；今田清蔵著〉〈弘前市史〉〈青森市沿革史〉〈青森市誌〉〈青森市史〉〈八戸藩史料—前田利見〉〈概説八戸の歴史〉〈黒石地方誌—佐藤耕次郎著〉〈黒石百年史；鳴海静蔵〉〈五所ヶ原町誌；福土貞蔵著〉〈五所川原市総合沿革史〉〈東津軽郡誌—西田源蔵著〉〈青森県西津軽郡誌〉〈西津軽郡史；佐藤公知著〉〈南津軽郡町村誌〉〈青森県下北地方誌〉〈下北半島史—笹沢魯半著〉〈三戸郡誌〉〈三戸郷土史北村芳太郎著〉〈岩手県郷土史；一戸隆次郎〉〈岩手県史談；志村義広著〉〈岩手県史〉〈南部史要；菊地悟郎著〉〈岩手県下之町村；高橋嘉太郎著〉〈南部叢書〉〈岩手県郷土史料〉〈岩手県郷土誌〉〈岩手県史〉〈盛岡市史〉〈宮古のあゆみ；沢内勇三著，鈴木哲，中島隆〉〈水沢町誌；後藤広著〉〈花巻の歴史〉〈南部仙台領境資料〉〈釜石市誌〉〈東磐井郡誌〉〈西磐井郡誌〉〈上閉伊郡誌〉〈岩手県下閉伊郡誌〉〈胆沢郡誌〉〈岩手郡誌〉〈紫波郡誌〉〈和賀郡誌〉〈和賀郡郷土資料〉〈江刺郡誌〉〈二戸小史〉〈九戸郡史〉〈九戸郡誌〉〈秋田県沿革史大成；橋本宗彦著〉〈秋田のむかし；石川理紀之助著〉〈新編出羽発達史〉〈秋田県史；狩野徳蔵著〉〈秋田叢書〉〈秋田県郷土誌〉〈秋田郷土叢話〉〈秋田県史；春日新一著〉〈総合郷土研究秋田県；小田内通敏著〉〈秋田県史〉〈秋田五十年史；安藤和風著〉〈秋田市史〉〈秋田の歴史；半田市太郎著〉〈能代史稿〉〈大館叢書〉〈横手郷土史〉〈横手郷土史資料〉〈湯沢郷土史資料〉〈大曲郷土史；大山順造著〉〈南秋田郡誌〉〈南秋田郡史—栗田茂治著〉〈北秋田郡小史；佐々木兵一著〉〈鹿角誌；

北海道と東北地方の地名関連について

内藤調一著> <鹿角郷土誌 ; 曲田慶吉著> <山本郡郷土史> <由利郡地誌> <秋田県河辺郡誌> <鹿角盆地集落地名の話 ; 高瀬吉五郎著> <柴平村誌 ; 佐藤与一著> <比内町誌> <合川町史> <十二所町郷土読本 ; 達子勝蔵著> <長木郷土読本 ; 達子勝蔵著> <綴子郷土読本 ; 達子勝蔵著> <阿仁発達史 (上) ; 柴田勝蔵著> <鷹巣郷土史 ; 大川多郎兵衛著> <榊史話 ; 浅野虎太著> <郷土史ひびきむら> <種梅村郷土史> <上岩川郷村考 ; 久東悦勢著> <男鹿半島の文化 ; 曲田慶吉著> <天王町戸郷土史> <港物語 ; 今野賢三> <外旭川村史> <寺内町誌> <土崎郷土史要 ; 土崎知善著> <太平川流域郷土史第 I 集, 第 II 集 ; 栗田茂治著> <河辺郡大観 ; 大塚定彬・上村鉄治> <仁井田村郷土史一相馬信太郎著> <四ツ小屋村史 ; 熊地治助著> <戸米川村誌> <大正寺村郷土史> <亀田郷> <矢島の歴史> <我等の郷土由利の面影 ; 阿部竜夫> <白岩村郷土史 ; 高木徳治> <神宮寺町を中心とした郷土史 ; 細谷則理著> <高梨村郷土沿革紀一後藤宙外著> <生保内町の歩み ; 田口秀吉著> <六郷明治百年小史> <土川村郷土史 岡田雄治著> <角館の歴史 武藤鉄成著> <十文字町郷土史> <羽後町郷土史大一集, 第二集> <雄勝町史> 等がある。

最近のものを加えると更に大きなものになる。

73) 東北地方に残存する Ainu 語に語源をもつ, 或は Ainu 語に語源があると思われる地名を簡単に分類してみると次のような形になるものと思われる。

- a) <náy> … 奥内・笹内・江流間内・シオヘナイ・入内・田子内・猿半内・沼宮内・弁慶内・小津久内・宇内・柴内・毛馬内・皿見内・生保内・西馬音内・樽見内・鹿内・山内・天内・田床内・板見内・祖半内・浅見内・佐羽内・相内・藍内・丹内・鳥舌内・西内・栃内・戸河内など
- b) <pét> …… 今別・厚別・瀬辺地・野辺地・苔米地・尾別・馬淵・宇部・仁別・波宇志別・覚鷲・小猿部・奥平部・乙辺地・土淵・カクベツ
- c) <sár> …… 尾去沢・猿倉沢・猿間・小猿間・猿ヶ石川・猿沢
- d) <…'omai> … 床舞
- e) <wákka> … 赤石・赤袴・赤畑・赤坂・赤萩
- f) <tó> …… 戸賀・西板戸・戸地谷・虎渡
- g) <táy> …… 払体・姉体・達古袋・番台
- h) <tap-cóp> … 達子・達子森・田子・達古袋
- i) <yáchi> …… 谷地・戸地谷・横菴・谷地中・富菴, 五月女菴原

北海道と東北地方の地名関連について

- j) <píra> ……大平・平形・赤平・平泉・平沢
 - k) <…'ushi>…中石・猿ヶ石
 - l) <tomari>…大泊・泊
 - m) その地
- 74) 金田一京助；<前掲・北奥地名考>・名取武光；<アイヌと考古学・(1)>など

2

然し乍ら以盧仮説が定説となるならば、地名学の立場から北海道と東北地方の関鎖を解義出来ない事はあるまいと考え、既説を含漱して新しい途轍を考えてみたのである。

従来和語で起源を説明出来ぬ場合 Ainu 語の語源説を採って来たと思われる妥協性地名が屢々散見した¹⁾。或は地名命名時の地形を現今の地形に求め其の起源を位置づける作業も一部に行われた²⁾。或は言語学的な音韻変化から今日の地名へ推移したと謂う推論も表徴もあった³⁾。が然し各れの場合も社会的な言語年代変化に注目することなく徒らに地名の分析、解釈のみに終止していたと思われる。

一旦、地名が定着してからも屢々二次的意義を添加することが有る。これが又言語の社会的通性である。譬えば記紀，万葉，風土記等の所謂表現体の地名は、今日の地名概念と異なる意趣をもっている⁴⁾。「うまし国ぞ，あきつくま やまとのくには」や「にひばり つくばを いくよかねつる」，「みずよする うまらきのくに」，「ころもで ひたちのくに」，一般的に「ももしきの 大宮」であり，「あおによし 奈良」の様に前詞乃至枕詞とともに成立したので有る。是当時の地名には，其の社会的通性と史的伝承が詞章とか枕詞となって共通の理解を地名に没入させていたものとみる⁵⁾。今日是の地名解釈に溯上することは至難である。Ainu 語についても全く同様な事が謂えるものと思われる。

更に言語の変移，変訛は史的現象の転推とは軌を一にして居るとは考

北海道と東北地方の地名関連について

えられぬ節も少くない。他民族他文化が土着文化へ直ちに言語変訛を与えるものでない。勿論言語放棄した場合は別であるが、其れでも解義を別にして残存する。或は変音して侵入民族の国字を仮借して残滓することもある⁶⁾。

同時に、北海道と東北地方との地理的位置から民族文化の移動についても一考を要する。Ainu 語の地名からみる限り Ainu 語系民族或は同系民族の生活圏が本州中央部至拡大していたとみる。其処へ南方民族或はより高度な文化の北進に伴い、Ainu 系民族は言語的にも後退を余儀なくされ生活基盤を北方に求めたものとみる事が出来る⁷⁾。

地名の年代学的変遷からみると、最初所謂基礎地名⁸⁾から抽象地名・記号地名を発展したものとみる。ここで問題になるのは基礎地名の中に Ainu 語の基礎地名と和語の基礎地名と区別されていたのか、含包されていたのかと謂う事である。東北地方の古言語を東国方言と称している。記録がないから断定は至難であるが、東国方言が土着語で後退する Ainu 語が重なったのか、Ainu 語が土着語でその上に東国方言が北進したのか各れも不明である。譬えば、野辺地の〈辺地〉が Ainu 語の〈pét〉或は〈pé〉であるとしても、〈野〉は和語の〈野〉なのか、Ainu 語の〈nú〉なのか不明である。尾別の〈別〉は〈pét〉としても〈尾〉は Ainu 語の〈'o〉なのか、和語の〈尾〉なのか杳として不明である。Ainu 語地名としての語尾は確か有るとしても、地名全体を解明する手掛りさえない。ただ、東国方言の言語学的性格からは Ainu 語が東国方言を形成した substratum 即ち基層語の一つではないかと考えられる。Ainu 語学からは否定されているが東国方言の母音組織の崩れや子音の注目すべき変化は、想像しがたい社会変化がない限り急変して民族内部の意志伝達が妨げられる様な言語表現が変転することがないとみられるからである。勿論、東国方言は東国で成立した言語で、西日本地方から北進した言語と、既に東北地方に定着して

北海道と東北地方の地名関連について

いた土着語とが混淆して出来たものとする、是の土着語こそ Ainu 語系の言語であったものと推定できる。言語表現の変遷は言語が持つ文法や音韻からみて他の歴史的現象と異なり極めて緩漫な変化しかしないので西部日本語が北進するにつれて東国方言になったなどという単純なものでないと考え、土着語があった言語環境へ北進語の西日本語が混入し東国方言を形成したものと見做すことも出来る。従って、〈野辺地〉の〈野〉が和語で 〈辺地〉が〈pét〉であっても不自然でなくなる⁹⁾。

移入語である西日本語と Ainu 語がある時代に於て重複し二重言語生活した地域が、東北地方なのである。二重言語生活といっても集落毎に独自の言語圏をもって「斑状文化」「斑状言語」を形成していたものとみることが出来、後に混在し、東北地方のマタギなどに残滓したものと肯定出来る。これが又東国方言であり東国方言圏であると考え。従って、Ainu 語の中に移入語である西日本語の影響を受けた語彙があっても不自然でない。東国方言は西日本語と Ainu 語の混成であるから、両語に両語の相互交錯関係があつて然るべきとも思われる。今日 Ainu 語と思われている語彙の中に西日本語的要素をもったものはないか考えてみた。

その手掛りとして、西日本語的要素を朝鮮語に求め、朝鮮語及び日本語、Ainu 語を対比し乍ら音韻に拠る共通を究明してみた。以下の語彙がそれに当る。

①朝鮮語 〈pata〉 〈pada〉 〈p'atan〉, 日本語 〈wata〉 〈bata〉, Ainu 語の 〈atuy〉 各れも海である。

②朝鮮語 〈yasi〉, 日本語 〈yachi〉, Ainu 語の 〈yachi〉 〈yaci〉 各れも野地・谷地である。

③ツングース語 〈nogō〉, (緑), 日本語 〈no〉, Ainu 語 〈núp〉 〈nu〉 野原のことである。

④朝鮮語 〈p'vl〉 〈p'e〉, 日本語 〈poru〉, Ainu 語の 〈póye〉

北海道と東北地方の地名関連について

- <pórie> 各れも掘ると訳す。
- ⑤朝鮮語 <kurum>, 日本語の <kumo> <kurmo>, Aínu 語 <kur> <kurmam> <nis-kur> 各れも雲である。
- ⑥朝鮮語 <mut>, 日本語の <puti> <puchi> 各れも淵, Aínu 語の <pút> 河口。
- ⑦朝鮮語 <p'i>, 日本語 <pië> <pihe>, Aínu 語 <piyapa> 各れも稗,
- ⑧朝鮮語 <t'ök> 「頭」, 日本語 <ö-tög-api> 「頤」, Aínu 語 <'e-tok> 「突端」
- ⑨朝鮮語 <poči>, 日本語 <pötö> <fötö>, Aínu 語 <pók> 各れも女陰,
- ⑩朝鮮語 <dërg> <telk>, 日本語 <töri>, Aínu 語 <terke> <ciri>, 朝鮮語は「鶏」他は「鳥」
- ⑪朝鮮語 <kömii>, 日本語 <kumo>, Aínu 語 <kom> 各れも蜘蛛,
- ⑫朝鮮語 <kom> <kuma>, 日本語 <kuma>, Aínu 語 <kucan> <kupan> <kuman> 各れも熊,
- ⑬朝鮮語 <kul-kū> 「転ろがす」, 日本語 <kuru-ma> 「車」 <kö-rö> 「転ろ」, Aínu 語の <kar> 「廻わる」 <kir-u> 「ひっくりかえる」
- ⑭朝鮮語 <tui>, 日本語 <takë>, Aínu 語 <top> <tog> 各れも竹。
- ⑮朝鮮語 <pəl> <pöl>, 日本語 <para>, Aínu 語の <para> 各れも原,
- ⑯朝鮮語 <mul>, 日本語 <mura>, Aínu 語 <mur> 各れも群,
- ⑰朝鮮語 <turi> 「面貌」, 日本語の <tura> 「面」, Aínu 語 <sir> > 「表面」
- ⑱朝鮮語 <moi> <muri>, 日本語 <mure>, Aínu 語 <muy>

北海道と東北地方の地名関連について

<muri> 各れも山。

⑲朝鮮語 <nai> <nari>, 日本語 <nare>, Aínu 語 <náy> <nari> 各れも河。

⑳朝鮮語 <kop>, 日本語 <kuma>, Aínu 語 <kom> 各れも曲っている。曲る。

㉑朝鮮語 <syöm>, 日本語 <sima>, Aínu 語 <suma>, Aínu 語の <suma> は岩石, 他は島。

㉒朝鮮語 <síl> 「酒」, 日本語 <siru> 「汁」, Aínu 語 <siruwa> 「醱酵する」

㉓朝鮮語 <tĩŋ> <tüŋ> <sää>, 日本語 <sö> <se>, Aínu 語 <se-tur> 各れも背。

㉔朝鮮語 <ač'əm>, 日本語 <asa> <asu> <asita> 各れも朝, Aínu 語 <asir> は新しい。

㉕朝鮮語 <tutil>, 日本語 <tata-ku>, Aínu 語 <tata> 各れも叩く。

㉖朝鮮語 <chip>, 日本語 <ipe> <yipe> <iipe>, Aínu 語 <cise> 各れも家。

各語¹⁰⁾に古語・雅語・方言・俗言を含んでいる。語彙の一致は無論偶然の一致もあるわけで、これらの地名類似性を地域分布で追いつら根拠を尋ねてみたいものと考えている。既に <sirar>, <tomari> <yachi>¹¹⁾などを考慮して究明して来たが、ここでは <hira> について考えてみたい。<hira> も無論東国方言を構成した移入語西日本語の一つであると考えたいのである。朝鮮語が西日本語と一致すると必ずしも思わないが、西日本語発生拠点の一つを朝鮮¹²⁾に求めてみたのである。

<註>

- 1) 既掲国郡市町村各市・誌類の殆んどが該当する。
- 2) 山田秀三「前掲書」
- 3) 知里真志保「アイヌ語入門」など。

北海道と東北地方の地名関連について

- 4) <折口信夫；日本文学の発生序説・斎藤書店> <藤沢衛彦；日本神話と伝説・天佑書房> など参考。
- 5) 拙稿；秋田地名の研究 秋田魁 前掲。
- 6) 拙稿；文化遺産としての地名 北海道新聞社，三木太郎；拙稿に関する批判，北海道風土研究会・同；空知地方史・同研究会などに拠る。
- 7) ただ問題となるのは，北方に後退したとするが，津軽海峡を民族が渡渉した記録も，言語上の手掛りも全くない。従来両地方の類似性酷似性の究明を急ぐあまり津軽海峡の位置的事実性を無視したものが少くない。海峡を超えた文化の伝播や民族の移動についてみると海峡はその文化・民族を全渡渉させるのではなく，文化及民族の撰択現象がおきるものと考えられる。従って東北地方に Ainu 語系民族がいたとしても同語同音が北海道に全てあるとは限らない。両地方の比較を安易にしてしまうことは自然地理的位置としての津軽海峡を無視してしまうことに撃かるものと思われる。しかし，一方に於いて津軽海峡の言語位置を知るために音韻及語いの究明がなされなければなるものと思われる。
- 8) 生活と自然が結びついている時代は自然発生的な地名が多かったものとみる。殊に狩猟民族にとって，狩猟の可能な場所は生活の成立する場所でもあって地名というより，狩猟民族の共通の生活圏を表現した目印であったものとみる。この種の自然発生地名は地名の出発であるので基礎地名と呼称しておく。
- 9) 清水潤三；蝦夷の文化とその特徴・史学15の3，氏家和典；古代の蝦夷と農耕文化・古代文化7の4

歴史的な立場からみると土着語以前に更に原土着語とみるべき幾つかの言語はあったのではないかと想定することも出来る。原土着語から土着語へ，土着語へ北進した西部日本語の混入があって，東国方言が形成されるものとみる。その混入の時期を特に限定することは出来ないが，弥生式時代に田舎館式へ榊形罎式が北進したように，又は北上した稲作が農耕様式を変えた前期などが，極めて有力な根拠といえはいいえる。東国方言の下に Ainu 語があって，substratum の役割を果たしたと考えても，substratum そのものが決定的な説得力とならないか解決せねばならぬ課題のひとつである。日本語の中の原日本語に substratum があるという事実を突きとめられてない今日，東国方言と原日本語の関係はよく解っていない。それだけで <富士> や <利根> や <阿蘇> が Ainu 語で解釈されても，意味がなくても否定する根拠がないととになる。その意味では日本語と原日本語・それらと東国方言・土着語などの相互年代を明らかにし，地名年代学を成立させることが急務であると思われる。

北海道と東北地方の地名関連について

- 10) 金田一京助；アイヌ語研究，三省堂，同；アイヌ文化史，服部健；ギリヤーク民話と裳装束」楡，服部四郎；日本語の系統，岩波，同；アイヌ語方言辞典，岩波，ITÔSEITI；NIPPONGO to AINUGO, など参考にしている。
- 11) 拙稿；北海道地名の分類(1)～(6)；北海道地理学会，人文地理学会・駒沢大学紀要などによる。
- 12) 沖縄方言も別に究明してあるが，ここでは省く，沖縄方言も古い時代，西南日本語から分派し比較的よく温存されているとされているので，今後の課題としたい。

3

これが和語と Ainu 語の対比なると更に多い。既に究明されてはいるが年代学的な手掛りとして掲げてみる。最初に語彙からみてみよう。

(Ai—Ainu 語の略，wa—wago—和語の略)

Ai.	(Ai の訳)	wa.	(wa の訳 Ai の語源) になったと思われる)
<asangi>	(青 い)	<浅 黄> ¹⁾	(あ さ ぎ)
<péko>	(牛)	<べ こ> ²⁾	(方 言)
<yú>	(温 泉)	< 湯 > ³⁾	(ゆ ・ お ゆ)
<ménoko>	(女)	<女の子>	(め の こ)
<tukí>	(杯)	<盃の語尾>	(さ か ず き)
<'otona>	(酋 長)	<大 人> ⁴⁾	(お と な)
<kání>	(金 銭)	< 金 > ⁵⁾	(か ね)
<kusurí>	(薬)	< 薬 >	(く す り)
<'ísátono>	(医 者)	<医 者>	(医 者 殿)
<tóno>	(役 人)	< 殿 >	(と の)
<ró>	(牢 屋)	< 牢 >	(牢 屋)
<hon>	(本)	< 本 >	(本)
<huté>	(筆)	< 筆 >	(ふ で)
<sumí>	(墨)	< 墨 >	(す み)

北海道と東北地方の地名関連について

<kámí>	(紙)	< 紙 >	(か み)
<sírosí>	(印)	< 璽 >	(し る し)
<hatá>	(旗)	< 旗 >	(は た)
<kurá>	(鞍)	< 鞍 >	(く ら)
<múci>	(鞭)	< 鞭 >	(む ち)
<kurumá>	(車)	< 車 >	(く る ま)
<káci>	(舵)	< 舵 >	(か じ)
<paci>	(罰)	< 罰 >	(ば ち)
<chama-ne>	(邪魔する)	<邪 魔>	(じ や ま す る)
<tanóntarí>	(依 頼)	<たのむ>	(た の む)
<sakayá>	(店)	<酒 屋>	(さ か や)
<'ataye>	(値 段)	<あたい>	(あ た い)
<'icén>	(小 銭)	<一 銭>	(い っ せ ん)
<yupíwa>	(指 輪)	<指 輪>	(ゆ び わ)
<tekupe>	(手 袋)	<手 袋>	(手 甲)
<kó> <kona>	(粉)	< 粉 >	(こ な)
<tánpaku>	(煙 草)	<煙 草>	(た ば こ)
<kuwás>	(菓 子)	<お菓子>	(く わ し—方言)
<sáke>	(酒)	< 酒 >	(さ け)
<síppo>	(塩)	< 塩 >	(し お)
<sató>	(砂 糖)	<砂 糖>	(さ と う)
<tonpurí>	(風 呂)	<風 呂>	(と っ ぶ り)
<hutón>	(蒲 団)	<蒲 団>	(ふ と ん)
<tané>	(種 子)	< 種 >	(た ぬ)
<tonpurí>	(どんぶり)	<どんぶり>	(ど ん ぶ り)
<tokkurí>	(饅)	<とっくり>	(と っ と り)
<pátci>	(櫃)	< 鉢 >	(は ち)

北海道と東北地方の地名関連について

<kamá>	(釜)	< 釜 >	(か ま)
<yakán>	(薬 罐)	< 薬 罐 >	(や か ん)
<cónko>	(漏 斗)	< 漏 斗 >	(じ ょ う ご)
<tósí>	(篩)	<ふるい>	(と う し)
<kánko>	(籠)	< 籠 >	(か ん ご—方言)
<pukúru>	(袋)	< 袋 >	(ふ く ろ)
<putá>	(蓋)	< 蓋 >	(ふ た)
<pera>	(匙)	<へ ら>	(へ ら)
<makíri>	(小 刀)	<小 刀>	(ま き り—方言)
<hasámí>	(鋏)	< 鋏 >	(は さ み)
<tónka>	(鋏)	<戸 鋏>	(と ぐ わ)
<náta>	(鉋)	< 鉋 >	(な た)
<nokó>	(鋸)	< 鋸 >	(の こ)
<kúnki>	(釘)	< 釘 >	(く ぎ)
<tuci>	(槌)	< 槌 >	(つ ち)
<kánetuci>	(鉄 鎚)	<金 鎚>	(か な づ ち)
<táma>	(弾 丸)	<弾 丸>	(た ま)
<téppo>	(鉄 砲)	<鉄 砲>	(て っ ぽ う)
<kánkami>	(鏡)	< 鏡 >	(か が み)
<'íta>	(板)	< 板 >	(い た)
<potoki>	(仏)	< 仏 >	(ほ と け)
<kamúy>	(神)	< 神 >	(か み)
<pónci>	(坊さん)	<坊さん>	(坊 ん ち)
<'ónkami>	(拝 む)	<拝 む>	(お が む)
<ténmari>	(毬)	<手 毬>	(て ま り)
<pakútci>	(賽 子)	<博 打>	(ば く ち)
<táyko>	(太 鼓)	<太 鼓>	(た い こ)

北海道と東北地方の地名関連について

<púta>	(豚)	< 豚 >	(ぶ た)
<'unma>	(馬)	< 馬 >	(う ま)
<sáme>	(鮫)	< 鮫 >	(さ め)
<'uni>	(海 胆)	<海 胆> ⁶⁾	(う に)
<múnki>	(麦)	< 麦 >	(む ぎ)
<kónpu>	(昆 布)	<昆 布>	(こ ん ぶ—方言)
<'imo>	(薯)	< 薯 >	(い も)
<kántomame>	(関東豆)	<落花生>	(かんとろ豆—方言)
<sapporo-'imo>	(薩摩薯)	<薩摩薯>	(さっぽろ薯)
<kími>	(とうもろこし)	< 黍 >	(き び—方言)
<'ántuki>	(小 豆)	<小 豆>	(あ づ き)
<mamé>	(大 豆)	<大 豆>	(ま め)
<mame>	(豆)	< 豆 >	(ま め)
<nori>	(海 苔)	<海 苔>	(の り)
<káni>	(金 属)	<金 属>	(か ね)
<teci>	(鉄)	< 鉄 >	(て つ)
<kurúnkani>	(鋼 鉄)	<鋼 鉄>	(く ろ が ね)
<sirokaní>	(銀)	< 銀 >	(し ろ が ね)
<kónkani>	(金)	< 金 >	(黄金—こがね)
<píkata>	(西南風)	<西南風>	(し か た—方言)
<kónkani-'iro>	(金 色)	<金 色>	(黄 金 色)
<tomarí>	(湾)	< 泊 >	(と ま り)

音韻の対比から幾つか列挙してみると次のようなものがある。順序はAinu語, 和語, () の中が各々の訳語である。

<axkapo> (赤子) <agi> (児—方言)⁷⁾, <arpa> (歩く) <aruku> (歩く), <ayay> (赤子)⁸⁾, <aya-su> (あやす), <ka> (疑問詞) <ka> (助詞のか), <kamu> (かぶさる) <kabu-ru> (かぶる)⁹⁾

北海道と東北地方の地名関連について

<kabuto> (かぶと)¹⁰⁾, <ni-kap> (樹皮) <kapa> (樹皮), <kap> (皮) <kapa> (皮), <kasa> (笠) <kay> (背負う) <kata> (肩), <na> (切る) <nata> (なた), <ra> (葉) <na> (葉), <para> (広い) <hara> (原), <tek> (手) <te> <ta> (手), <tori> (土) <ta> (田), <'ota> (砂地) <oda> (泥田), <wa> (周囲) <wa> (輪), <ya> (破る) <ya> (破るの語幹), <yaci> (野地) <yati> (谷地), <tu> (古い) <ato> (跡), <tur> (濁り) <doro> (泥), <tu> (糸) <ito> (糸), <mun> (草) <mo> (藻), <nup> (野) <no> (野), <nun> (吸う) <nomu> (呑む) <nociw> (星) <nozomu> (望む), <oyupa> (泳ぐ) <oyo-gu> (泳ぐ), <ona> (父) <oya> (親), <poru> (洞) <pora> (洞), <porie> (堀る) <poru> (堀る), <uyna> (灰) <yona> (火山灰), <kum> (関接) <kuma> (曲), <hur> (影) <kumo> (雲), <kuri> (グイマツ) <kure> (丸太), <kut> (のど) <kutu-kuti> (口), <mos> (蠅) <musi> (虫), <put> (河口) <puti> (淵), <tokito> (コノハズク) <tuku> (ミミズク), <ure> (足) <ura> (裏), <uta> (搗く) <uta> (歌), <yup> (しめる, しまる) <yupu> (結う), <asir> (新しい) <asita> (朝), <ipe> (食事) <ipi> (飯), <itak> (語る) <itako> (イタコ=坐子), <ki> (かやのくき) <ki> ススキのキ), <mike> (光) <migaku> (磨く), <nitat> (湿地) <nita-nuta> (湿地)¹¹⁾, <piyapa> (稗) <pië> (稗), <siw> (にがい) <sibu> (渋い), <sittek> (静) <siduka> (静か), <kaw> (声) <köwe> (声), <mot> (背骨) <mötö> (本), <se> (背) <sə> (背), <soy> (外) <sötö> (外), <peker> (明るい) <pika-ru> (光る), <pari> (春) <pari> (春), <pe> (水) <pi> (氷), <pa> (先) <pashi> (端), <nar> (平地) <naru> (小平担地), <nís> (空) <nizi> (虹), <musis

北海道と東北地方の地名関連について

> (噓る) <museru> (むせる), <suma> (岩) <sima> (島)¹²⁾, <sut> (根本) <sudi> (筋), 等がある。これら Aínu 語¹³⁾ のうちに北海道に北進した和人語を外来語として受入れたもの¹⁴⁾ と, 東北地方で所謂東国方言を形成した和語的 (西日本語) 要素をもつ Aínu 語¹⁵⁾ も幾つかあるものと思われる。例えば, <'uma> や <péko> などが狩獣民族に当初関係なかったからと謂って北海道で受け入れられたとは断定出来ない。或は東国方言の中で造成されたものが津軽海峡を渉ったのかも知れない。ただ, 北海道にも東北地方にも地名として定着し両地方に各々の意味あいに残存しているものをみると,

a), <píkata> south-wind と訳されているが, 他に <menás> <'ásno-menas> 等の表現があった。上川 Aínu は <píkata> を北風に用いた。幌別及び日高 Aínu は南風或は西南風に用いている。地名としては北海道久遠郡太田の <píkata-tomari>, 同蓮華歌の <píkata-tomari>, 増毛町歩古丹¹⁶⁾ の <píkata-tomari> 等がある。風位についてみると西南風を <píkata> と呼称している地域は, 函館・恵山・松前・吉岡・江差・島牧・岩内・美国・石狩等である。<níshí-píkata> の呼称は, 浜益・増毛・苫前等である。<píkata> を <shikata> と表現するのは天塩沿岸か宗谷岬にかけてである。上磯及び函館の一部では <kudari-shikata> を用いる場合もある。寿都では北西風に対して <píkata> と謂っている。

東北地方青森県では西南風を指して <píkata> としている。東津軽・西津軽・北津軽及び下北・上北・三戸の各郡がそれにあたる。地域によっては <níshi-shikata> 或は <fúkata> と表現している。秋田県山本, 南秋田・由利の各郡は <píkata>, 岩手県の九戸が <píkata> といっている。この地域から南は <narai>¹⁷⁾ が用いられるようになる。山形県西田川, 飽海等でも <píkata>, 新潟でも <píkata> を用いる。島根・山口・福岡の一部でも <píkata> を用いる。万葉の七「あまぎ

北海道と東北地方の地名関連について

らひ 日方吹くらし」とあるのをみても万葉以前に単語として成立し東国方言に混在し北進したものとみる。

b), <yachi> は一般に湿地と訳しているが, 和語の「野地」とも関係があるとみられている。Ainu 語は <yachi> の他に <níta> 或は <nítta> を用うる事がある。<yachi> が直ちに「谷地」としてよいかは今のところ疑問である。Ainu 語の使用例をみると, <sar-'ónne-'us> も湿地である。<yachi-kotací> と謂えば「泥がついて汚れた」事であり, <yachi-'us> とは「泥のつく」意味をもっている。<rú-'epítta-yachi-án-kane-'ápkas-ka-'eáykar> と謂えば, 「水が藩って一杯になった」であるし, <yachíne-'uske> とは, 「泥濘」を指し, 単に <yachi> だけで「泥」を指す事もある。

是の <yachi> は東北地方は勿論関東・中部地方に渉って分布している。もっとも, <やじ> <やづ> <やじやつか> <やちっぺ> <やとだ>¹⁸⁾ <やつだ> <やちっぽ> 等変化は有るが, 各れの「語幹」も <yachi> で類似解釈が出来るものと思われる。地名数は他の地名と比較して決して少くない。<yachi> も同様に北進した語の一つであるとみる。

c), <íchari> 北海道の地名の中で「一己」¹⁹⁾「漁火」²⁰⁾等「筧」「篩」等と訳すものがある。溯上する鮭を獲る筧の事である。従って, 鮭漁のある河岸の地名となる事が多い。ところが, 山梨, 静岡では筧の事を <izaru>, 長野では <izayaro>, 盛岡では <'ezaru>。倭名鈔では <azika>, 字鏡に <azika> 或は <izaru> と同謂とある。愛知から兵庫に至る地域は <ikaki> がある。筧の古語は <azika> <shitami> <izaru> <ikaki> 等が各地に定着し, <izaru> が北進したものとみる。これらの他に, <kichi> (槽) や <makiri> (小刀), <pancho> (大工), <matagi> (獵師), <bataki> (蝗・蟋蟀), <tomari> (泊), <ménoko> (女), <'otona> (酋長), <kamúy> (神), <

北海道と東北地方の地名関連について

'ónkami> (拝む), <kónpu> (昆布), <hoíto> (乞食) 等各れも北進した語彙の一つであると思われる。語彙の年代学的考証解明は至難であるが、これらと同一と考えられる <píra> の構成を追ってみようと思う。他の語彙も逐次究明していきたいものと考えている。

<註>

- 1) 浅葱を混合して浅黄と書くが、色は薄い葱の葉の色、Ainu 語のアサギは浅葱と訳すべきものとする。ただ、玉勝間や歌林四季物語などには浅く染めた黄色を指しているのが混合しやすい。浅葱の記録は源氏、今昔などが古い方で、それ以前は不明である。
- 2) べこ或はべここと表現する東北地方が多い。
- 3) Ainu 語で別に <sesek> がある。<sesek> は道東語で北方系といわれるだけに道央・道南には分布していない。
- 4) 「乙名」と書くことが多い、江戸時代、松前藩主に統轄された Ainu の酋長の名(日本国語大辞典)とあるが、平家物語にある年長者、宿老、義経記にある譜代の長老の意味があるので、これ以降に流讞されたものとする時代が降りすぎる。
- 5) <かね> はらくいん・金属・金泊などの総称で、通貨のカネは類聚名物考などによると <兼ねる> から出たとしている。方言としては比較的早くから <カネ> が使われていたふしがある。
- 6) 別に <nóna> がある。ウニはバフソウニを指し、<ノナ> はムラサキウニに区別しているが、かつて <ノナ> が <ウニ> の総称であった確証はない。
- 7) 方言とはいわゆる広範囲にひろがっている。日本語原考に拠ると Angko 或は Akko から生れたものとしている。
- 8) <アヤ> 青森・秋田などの方言、<アヤコ> は子供の遊びの方言だが、お手玉のこともいう。柳田国男の口承文芸史には <アヤシ> <アヤカル> <アヤマチ> が同系語だとしている。だとすると <アヤス> 即ち子供をあやすのも同系語と考えてよいのではないか。
- 9) 音史からみると平安初期以降あらわれる(日本国語大辞典)
- 10) <カブ> は頭とみている(古事記伝) <ト> は事物を意味する接尾語(日本古語大辞典)とすると <カブト> <カブサル> <カブリ> <カブムリ> <カブリック> など同系語と考えられる。
- 11) 拙稿;北海道地名の分類(4~2)和語で <沼田> を <ぬた> と称する地方があることを指適した。

北海道と東北地方の地名関連について

- 12) 拙稿；人文地理学会研究報告要項（S47）で指摘してある。
- 13) ITÔSEITI；NIPPONGO to AINUGO に負うところが多い。
- 14) 根拠のあるものは少いが，次の語は北海道の中で Ainu 語化された所謂外来語と推測している。〈浅黄〉〈金〉〈薬〉〈医者〉〈役人〉〈牢〉〈本〉〈旗〉〈鞍〉〈鞭〉〈車〉〈舵〉〈罰〉〈酒屋〉〈あたい〉〈一銭〉〈指輪〉〈手袋〉〈煙草〉〈お菓子〉〈蒲団〉〈どんぶり〉〈とっくり〉〈やかん〉〈漏斗〉〈ふるい〉〈鋏〉〈戸鋏〉〈鉦〉〈鋸〉〈釘〉〈金鎚〉〈弾丸〉〈板〉〈毬〉〈落花生〉〈薩摩薯〉〈黍〉即ち平安初期に言語変遷あったとするとそれ以降ともみる。
- 15) 〈pikata〉〈yachi〉〈ichari〉〈kichi〉〈makiri〉〈pancho〉〈matagi〉〈bataki〉〈tomari〉〈menoko〉〈'otona〉〈kamúy〉〈'onkami〉〈kónpu〉〈hoito〉〈uni〉〈kani〉等で，平安初期以降をしても東北方言などから，北海道で完成されたものと思われぬ語を含んでいる。
- 16) 拙稿；増毛町の地名・歩古丹の項〈aibi-kotan〉の転訛で〈アユミ・コタン〉になったもの。
- 17) 〈narai〉は北風と一般に書く，地名として本州各地にある。〈ナライ〉は〈ナロ〉〈ナラス〉〈ナラ〉などと同系と思われる。奈良もこの類語と考えられる。
- 18) 〈ヤズ〉は谷津，〈ヤトダ〉は谷戸田の地名として各地に残っている。
- 19) 〈一己〉は〈イッチャン〉と読む
- 20) 〈漁火〉は〈イザリ〉と呼ぶ。

4

Ainu 語の 〈píra〉は「崖」と訳されている。千島 Ainu は崖の他に岩とも訳している。〈as-píra〉は特に「断崖」としている。〈píra〉は地名に用いる場合「急崖」と訳した方が適切なこともある。亦，時によっては「急な崖」「崖が急だ」と非名詞的性格も持っている。Ainu 語では 〈pí〉と 〈bi〉が同音なので，和語では「ピラ」「ピラ」「ヒラ」各れにも発音され不統一である。

崖を表わす Ainu 語は 〈píra〉の他に 〈pesh〉〈iramí〉¹⁾ 〈kút〉²⁾ 等がある。一般には 〈píra〉と 〈pesh〉が用いられている。〈píra〉が「崖」で 〈pesh〉が「懸崖」³⁾「潰崖」であると地形的差異

で説くこともあるが、実際の地形を比較してみても、是の説には賛同できない。従って、同義語として扱ってよいと考える。地名年代学的な差異とした方が適切である。

河川上流の「崖」を指して <pinay> と謂が、<píra-nay> 即ち <péra-náy> の変訛とみてよい。「崖沢」だとか「沢の上流の崖」と訳すべきであろう。地名からみると <pesh> に酷似している <pesuí> や <peshíuí> <peshí>⁴⁾ は各れも千島列島に散在し、千島特有の表現である。<pesuí> は「谷川」<peshíui> や <peshi> は「沢」である。内陸部の <náy> に相当する。千島列島や樺太に残存する地名は直接和語の影響が近年至なかったものとみて、古語を保つ事が出来たし北方系言語の影響も少くないと推定されている。

<pesh> が北方系言語か Ainu 語の古語なのか検討する資料はない。<pesh> が地名記録されるまでの史的過程も、全ての <pesh> も再現する事は不可能に近い。これが亦地名究明者の宿命でもある。一つの手掛りとして <píra> と <pesh> の分布図を作成した。これらの地名の内には命名地の移動したもの、和人が命名した地名が挿入されているものが有るかも知れぬが確める術はない。<東西蝦夷山川取調図>⁵⁾ <三航蝦夷日誌>⁶⁾ <東蝦夷誌>⁷⁾ <西蝦夷日誌>⁸⁾ <蝦夷日記>⁹⁾ <東海參譚>¹⁰⁾ <蝦夷日記>¹¹⁾ <北夷談>¹²⁾ <協和私役>¹³⁾ <東遊記>¹⁴⁾ <石狩十勝両河記行>¹⁵⁾ <蝦夷語地名解>¹⁶⁾ 等に散見するものと各地町村史及び現地調査併せて蒐集図化してみた(第1図参照)。別に樺太にある <píra> をみると、真岡郡広地村の <píra-'óro>¹⁷⁾、同地の <píra-étu-'óro-náy-po>¹⁸⁾、真岡郡野田町 <póro-píra>¹⁹⁾、本斗郡本斗町 <cí-ínomi-píra>²⁰⁾、元泊郡の <kamuy-píra>²¹⁾、北宗谷の <tay-píra>²²⁾、本斗町吐鱈村の <wén-píra>²³⁾、鵜城郡幌岸の <wén-píra>²⁴⁾ 等があるが分布量が少なく図化することも出来ないでいる。

<píra> と <pesh> を比較検討してみると第一には地名量からいっ

北海道と東北地方の地名関連について

て <píra> の方が多いということと、第二に <pesh> は地域的に分布が限定されている事が特徴である。<pesh> の分布は主に紋別・網走・斜里・目梨・花咲・釧路方面の所謂道東地域と幌泉・虻田・茅部・古宇・増毛等に散見する。<píra> 及 <pesh> の分布は土地の高低と関連し平野部にはない。ただ、松前やニセコ、天塩川上流等当然 <píra> 或は <pesh> の地名が散見してよい筈なのに見当たらない。記録されなかったのか、狩猟生活圏外なのか消極的活動地域だったのか、和人の北進で改名なされたのか各れも不明である。<pesh> が <píra> の古語で <píra> 以前語である根拠はないが、北海道東部の分布量をみると南進語か或は <píra> の下積語であったとみてよいのではなからうか。

<pesh> の主な分布をみてみると <wén-pesh> (釧路・斜里・網走) <wén-peshi> (島牧・三石) <hure-pesh> (古平・幌泉・釧路) <retara-pesh> (斜里・古宇・虻田) <wén-pesh-'utur> (浦河・幌泉・目梨) <ri-pesh-i> (釧路・網走・紋別) <'esan-pesh-i> (古宇・花咲) <pesh-i-'etu> (幌泉・常呂) <pesh-'oma-náy> (虻田・斜里) <pesh-'útur-náy> (増毛) <pesh-étoko-'oma-náy> (枝幸) <pesh-makoma-náy> (網走) <káya-'un-pesh> (茅部) <pesh-kotoro> (三石) <pesh-pok> (浦河) <pesh-pák-i> (斜里) <pesh-i-tukary> (増毛・三石) 等がある。<pesh> は海岸の崖²⁵⁾に限定して考えた事があるが必ずしも海岸とは限らない。又、<pesh> に <pesh-náy> の結びつきはあるが <pesh-pét> は用いない。<pesh-náy> と <píra-pét> に年代学的差異があるのか、地形的名称の差異か、語法的差異があるのか各れも不明である。

しかし、Ainu 語の崖は、一般に <píra> と考えてよい程の分布量なので <píra> を解明する事が <pesh> との差異を説く事になるものと考えている。

北海道と東北地方の地名関連について

<píra> が単独で地名となっている地方もあるが、多くは形容詞・副詞を伴い地名として構成されるので、代表的な <píra> を掲げ²⁶⁾ 語法上の問題と分布を究明する資料としたい。

<pank-tuye-píra 札幌30>²⁷⁾ <penke-tuye-píra 札幌31> <píra 神楽51> <píra-úтуру-'oma 美瑛52> <píra 樺戸55> <so-'o-píra 雨竜59> <píra-'utur-'oma 空知62> <píra-'utur-'oma 空知64> <píra-noshike-'oma-náy 同66> <tuye-píra 同68> <poro-péra 夕張71> <ri-píra 同73> <ri-píra 厚田83> <hure-píra 余市95> <'o-píra-shuma 島牧125> <píra-ko-'an-pét 同125> <wén-píra 同129> <ri-píra 瀬棚134> <sei-o-píra 同135> <me-'ush-píra 同136> <sei-'o-píra 同138> <ri-píra 太櫓140> <píra-ta-náy 久遠143> <tanne-píra 同144> <píra-ta-san-náy 爾志146> <píra-ka-tay 同147> <rutke-píra 亀田157> <hure-píra 同158> <chep-un-píra 茅部161> <píra-'utur 同161> <píra 山越164> <ri-píra 同165> <kunne-píra 同166> <so-ran-píra 同166> <pon-píra 同167> <píra-ka-san-náy 同169> <píra 同169> <tanne-píra 虻田180> <hure-píra 有珠183> <ri-píra 同185> <panke-píra 長流186> <penke-píra 同187> <ri-píra 白老203> <tanne-píra 同203> <póro-péra 勇払211> <píra-'utur 同211> <'esan-píra 同212> <pón-pera 同212> <píra-'utur-náy 同214> <'are-píra-pét 同215> <'are-píra 同215> <píraka-沙流228> <píra-'utur-i 同229> <píra-'utur-i 同229> <píra-chimi 同230> <píra-chimi-ka 同230> <kunne-píra 同231> <ri-píra 同231> <píra-chimi-náy 同231> <kur'um-píra 新冠244> <mo-píra 同245> <píra-kes-'oma-náy 同245> <píra-kes-'oma-náy 同248> <píra-chimip 同249> <pón-píra 三石268> <píra-'utur-kush-náy 浦河272> <inun-píra 同272> <hure-píra 様似284> <'o-píra-'oma 同284> <píra-'utur 広尾293> <yuk-píra 中川

北海道と東北地方の地名関連について

302> <píra-'oma-náy 同302> <'uturman-píra 同302> <kunpe-píra 同303> <'o-píra-raru-kama-p 同306> <ri-píra-hesh-'oma-náy 同 306> <kunne-píra 同309> <hum-'use-píra 音更310> <tatpu-ni-'ush-píra 同310> <'ashiri-píra 同310> <ri-píra 同310> <píra-'oma-náy 同314> <áshiri-píra 帯広316> <kotoro-ratki-píra 同316> <'uhui-píra 河西317> <píra-'oma-náy 同317> <pón-péra 白糖322> <'ato-píra 同323> <ri-píra 釧路331> <pon-tuye-píra 同333> <shushu-píra-nay 同339> <sar-po-píra 同340> <píra 川上342> <chep-'un-píra 同342> <pu'ra-'oro 同344> <yuk-píra 西別347> <'uko-tuye-píra 同348> <náy-kot-'oro-píra 同 348> <hure-píra 川上351> <retara-píra-ran-ushi-ke 同351> <'at-úsh-píra 根室370> <píra-'utur-'oma-náy 野村373> <píra-'etu 同373> <píra 同373> <'ota-péra 同375> <ikitara-píra 同375> <tat-ni-pon-píra 同376> <toy-píra 標津377> <toy-píra-pake 同377> <kunne-píra 目梨383> <isaman-píra 同383> <tum-ta-'an-píra 同388> <hure-píra 同 388> <kunne-píra 同388> <píra 留萌 394> <píra 同394> <ri-píra 同402> <hure-píra-náy 同403> <wén-píra 同403> <píra-'etoko-'oma-náy 同404> <píra-chu-ush-i 同408> <ku't-píra 同408> <tuye-píra 天塩412> <píra-pok 宗谷428> <píra-chimi-náy 同432> <píra-pok 同432> <'opira-'un-náy 紋別448> <toy-píra 同499> <píra 興部452> <tue-píra 同453> <retar-píra 同453> <chi-tukan-píra 紋別455> <hure-toy-píra 常呂462> <retara-toy-píra 同462> <poro-náy-píra 同466> <wén-píra 同466> <mo-i-kotan-píra 同468> <wén-tanne-píra 同470> <tuye-píra 同470> <píra-'oro 同471> <píra-kesh-'oma-náy 網走477> <píra-pa-kush-náy 同477> <píra-'utur-'oma-náy 同478> <píra-oshumak-'oma-náy 同481> <tanne-píra 同482> <ikush-pe-ásh-píra 同483> <píra-'oro 美幌

北海道と東北地方の地名関連について

484> <tanne-píra 斜里496> <píra 山越17> <ri-píra 同18> <tanne-píra 同19> <hepe-píra 同20> <kunne-píra 同20> <só-'un-píra 同20> <so-pe-píra 瀬棚22> <píra同 26> <tanne-píra 同27> <'o-píra 同28> <siyo-píra 同29> <siyo-píra 同31> <kuta-ke-píra 同32> <ri-píra 同32> <ashir-píra 同32> <ri-huri 有珠75> <píra-so 洞爺80> <hure-píra 虻田82> <póro-chimi-píra 室蘭86> <hure-píra 同86> 等がある。ジョン・バチエラー²⁸⁾は特定の地域を指摘していないが <píra> に就いての記録がある。<a-píra²⁹⁾(abira)³⁰⁾> <píra-tour-kotan (biratori)³¹⁾> <píra-'utur-kotan (bíru-turu)³²⁾> <píro-chi-na (birochinai)³³⁾> <píro-náy (biro)³⁴⁾> <píro-puni-kotan (berufune)³⁵⁾> <hure-píra (hurubira)³⁶⁾> <píra-gesh-i (hirakishi)³⁷⁾> <piratori (hiramura)³⁸⁾> <inao-píra (inao-toge)³⁹⁾> 等がある。

これらの <píra> を語法的見地から分類してみると、

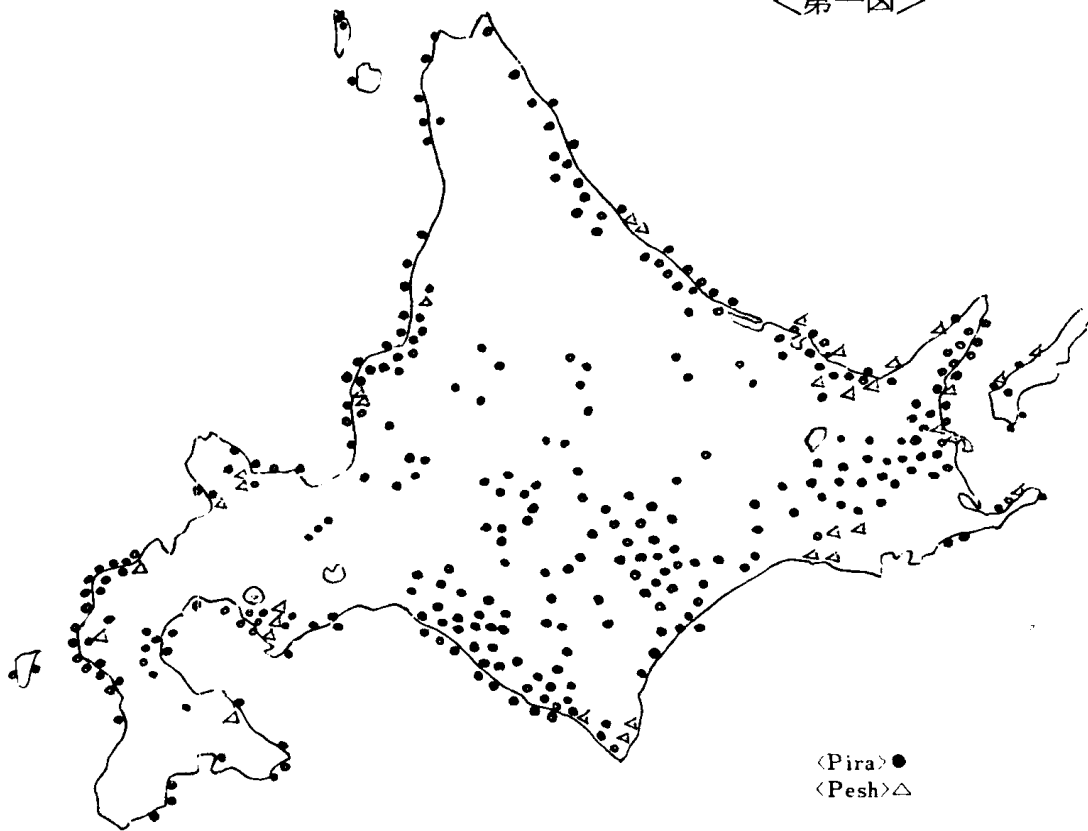
- ㊶ <píra> のみの単独地名 (秩父別・樺戸・八雲・山越・新冠・釧路・別海・留萌⁴⁰⁾・興部等)
- ㊷ <píra-'utur⁴¹⁾-'oma⁴²⁾-náy⁴³⁾> 等 <píra> と <'utur> の結合したもの (平岸⁴⁴⁾・美瑛⁴⁵⁾・空知⁴⁶⁾・島牧・八雲⁴⁷⁾・勇払・沙流・平取・新冠⁴⁸⁾⁴⁹⁾・静内⁵⁰⁾・浦河・広尾・中川⁵¹⁾・浦幌・河西・白糠⁵²⁾・別海³⁵⁾・苫前⁵⁴⁾・古丹別・紋別⁵⁵⁾・胆振・網走)
- ㊸ <píra-pok-'oma-náy> <píra-kes-'oma-náy> <píra-'oro-náy> 等 <píra> と <'oma-náy> 或は <'oro-náy> の形のもの (札幌・忍路・弟子屈・宗谷・常呂⁵⁶⁾・美幌)
- ㊹ <形容詞+píra> のもの一般的といえる。(豊平・空知・夕張・厚田・瀬棚・太櫓・熊石・八雲・有珠・白老・沙流・陸別・足寄・釧路・網走・余市・興部・斜里・西別・常呂・亀田・浦河・別海・苫前・久遠・島牧・静内・白糠・新冠・中川・茅部・標津・紋別・古丹別・目梨・根室・河東・河西・弟子屈・天塩)

北海道と東北地方の地名関連について

⊕その他の <pira> に区分出来る。

Ainu 語の <pira> に漢字を仮借して殆んど「平」の字を当嵌めている。<赤平>⁵⁷⁾ <豊平>⁵⁸⁾ <平岸>⁵⁹⁾ <平取>⁶⁰⁾ <平賀>⁶¹⁾ <平絲>⁶²⁾ <小平薬>⁶³⁾ <上平>⁶⁴⁾ <活平>⁶⁵⁾ <古平>⁶⁶⁾ <安平>⁶⁷⁾ <穩弥平>⁶⁸⁾ <平苫内>⁶⁹⁾ 等がある。東北各地に散在する「平」と同義語同音とすると <pira> の地名数量が多過ぎると考えられて、Ainu 語説が有力であったが、狩猟時代にとって崖は生活の障害で有っただけでなく、狩猟場所を記憶させる地形の一つだと考えると決して多すぎる地名量ではない。殊に海岸地形⁷⁰⁾ 及び河川周辺地形は狩猟採集に直接関係が有っただけに見逃がす事の出来ない地名だったものと思われる。後に北進した和人もピラと表現し地形的目印として用いていたものである。

<第一図>



北海道と東北地方の地名関連について

<註>

- 1) <irami> は本来 mygoodness に用いられ <irami-irami-irami> とつづけていい, 別に <'iya-'iya-'iya> ともいう。崖にぶつかって驚いた時の状態を指したものである。
- 2) <kút> は本来, 帯のこと, <kúttor> といえは動詞となって“帯をしめる, となる。<kút-kar> とは帯を織ること, <hónne-no-kút-kor> 帯をゆるくすること, <píra> と結びつくと露頭のある崖, 地層のある崖を指している。
- 3) 赤木三兵; アイヌ語集—アイヌ語小辞典— (p 26), 切りたった崖というが, 比較がないので不明
- 4) <pesh> と <i> の結びついたものである。語幹は古語の <pe> の水に関連するもので <pe> + <'ush> の変化とも考えられる。即ち水際と考えてよいのではないか。<pesh> を古語或は北方系語系と考えられる理由の一つでもある。
- 5) 松浦武四郎; 東西蝦夷山川地理取調図, 安政 6, 木版和紙折疊 1 舗, 北海道大学付属図書館蔵
- 6) 同 上; 吉川弘文館, 吉田武三校訂, 昭46, 2 刊
- 7) 同 上; 時事新書, 蝦夷日誌 (上) 吉田常吉編, 昭37刊
- 8) 同 上; 同 上, 蝦夷日誌 (下) 同 上, 同 上
- 9) 武藤勘蔵; 日本庶民生活史料集成, 第 4 巻, 三一書房, 高倉新一郎編13~22 p
- 10) 東甯元稹; 同 上, 同上, 同 上, 同 上 23~44 p
- 11) 児山紀成; 同 上, 同上, 同 上, 同 上 45~76 p
- 12) 松田伝十郎; 同 上, 同上, 同 上, 同 上 77~176 p
- 13) 窪田子蔵; 同 上, 同上, 同 上, 同 上 23~270 p
- 14) 平秩東作; 同 上, 同上, 同 上, 同 上415~438 p
- 15) 松本十郎; 同 上, 同上, 同 上, 同 上338~386 p
- 16) 永田方正; 北海道蝦夷語地名解, 北海道連合教育会, 明24.
- 17) 休明光記卷三 <カラフト嶋見分として中村小市郎, 高橋次太夫相越来>
1801, 北海道大学図書館蔵。新撰北海道史第 5 巻史料篇, 鈴木重尚; <甲寅唐太日記> 上下1861等の記録による。
- 18) 知里真志保; <地名アイヌ語小辞典> 楡書房1956, 松永聰剣; <樺太及勘察加> 博文館1905などの記録による。
- 19) 鈴木重尚; 前掲書, 下巻
- 20) 池上巳三郎; 萩野素助<樺太沿革史> 1930, 樺太庁.
- 21) 松浦武四郎; <北蝦夷余誌> 1857, 北海道所蔵.

北海道と東北地方の地名関連について

- 22) 佐々木政太郎；〈樺太アイヌ語地名小辞典〉 みやま書房，昭44.
- 23) 同 上； 同 上
- 24) 同 上； 同 上
- 25) 〈pesh〉は海岸の崖のみ指すのだともいうのは，神保小盾，金沢庄三郎；アイヌ語会話字典〉金港堂書籍，明31，しかし，実際には〈pesh-'oma-náy〉などがあるので肯定できない。もっともその崖が川尻にあるとすればだが限定はむづかしい。ただ，海岸に多いことは事実である。
- 26) 永田方正；前掲書
- 27) 永田方正；前掲書中の頁数である。その他松浦武四郎；前掲書を参考にしている。ただ，重複すると困るので，永田を中心に考えておいた。
- 28) ジョンバチェラー；〈アイヌ地名考〉北海道連合会，明24.
- 29) 〈'a-píra〉は尖れる断崖とバチェラーは訳している。更科源蔵；〈アイヌ語地名解〉北書房，昭41，65 p では〈ara-píra-pét〉の転訛で，片側に崖のある川としている。赤木三兵；〈地名の旅〉山音文学会，昭46，4 p でも，全く同様の解釈をしている。今日の安平〈アピラ〉のことである。
- 30) () はバチェラーが考案した日本語の発音形式を写つたものである。
- 31) 今日の平取〈ピラトリ〉の事であろうと思われる。バチェラーは断崖の湖水の付近の林としている。更科源蔵；前掲書によると〈píra-'útur〉即ち断崖と断崖の間であるとしているのに，赤木三兵；前掲書では〈píra-'úturnáy〉としている，即ち断崖と断崖との間の川としている。山田秀三もこの平取にふれいてるが，語源は未だ不明のままである。
- 32) 断崖の間の村としている。バチェラーは又樺太アイヌの研究者たるトブロッヴォルスキは「開きたる場所」即ち〈Biru-turu〉とっていると添加しているが，真疑不明，平取には沙流川を挟んで〈hi-ó-píra〉と〈ku-ó-píra〉があったので，その中間だったから〈píra-'útur〉とといったにすぎないと知里真志保は述べている。
- 33) “断崖の谷，”のことで，ポローオーナイが訳されたものという。意図が不明・広尾のことであろう。
- 34) 断崖の谷の複数形で，chi は時として〈t〉に対する複数だという。断崖の複数所は肯づけない，場所も不明である。
- 35) “比羅夫，”のことであろう。更科，赤木等の上掲書によると阿倍比羅夫が恰も，この駅を作ったかのように書かれているが信じられないとして〈píra〉か源名としている。バチェラーは〈píro-puni-kotan〉から来ているとしている。〈puni〉は屹立せるとしているが考えさせられる。
- 36) “小山の崖，”としている。更科は〈hure-píra〉と説いている。後者が一般

北海道と東北地方の地名関連について

的で奇を地名に求めることは必要あるまい。古平のことであろう。

- 37) 平岸は赤平と札幌の地名が代表的である。更科は <píra-kesh> としている。山田秀三 <札幌のアイヌ地名を重ねて> も同解釈である。バチェラーの訳も当たっている。
- 38) 平取と同じだが、平村という場所不明。
- 39) <inao> は祭具として削りたる木片と註訳がついている。更科；上掲書によると <inau-'ush> で木弊のいつも多くあるところとなっている。拙稿；北海道の地名分類① オハシナイについてに詳しい。北海道内の稲穂峠、稲穂岬の殆どこの語源はこれにある。
- 40) 留萌市内の <píra> は2ヶ所に存在する。1ヶ所は礼受町にあって増毛郡との境界に近い、今でもピラと呼称している。もう1ヶ所は市立病院の下、瀬越浜までの急崖を松浦の日誌類などにピラとある。この他に記録に残っていないが。別荘のオタルオマナイ <'ot-ru-'oma-náy> に至る岬をピラと呼んででいる。和人は赤禿山とも呼称している。拙稿；増毛町の地名、別荘の項参照ありたい。
- 41) <'utur> は「の間」と訳される、単独に「ウトロ」(知床)の地名もあるが、もともと <píra-'utur> であったものと思われる。地形からみて <píra> を除いて <'utur> だけでは地名にならぬものとされる。一般の会話の中では <tun-néwe-'utura-payé> (二人とも出掛けた)、<túppis-'uturano-ku'áhúpkar> (二つとも取上げた) などと使われている。抱合語の宿命から <kútutur> (崖の間)、<món'utur-'an> (することがない) などとも使われている。拙稿；北海道の地名分類②～③参照
- 42) <'oma> は動詞で単数で(「そこ」にある、いる)の事で、複数は <'o> なのである。ただ、文になると複雑で厄介である。例えば <súy-'omá> (穴があいている)、<kamúp-'oro-'omá> (わなにかかる)、<hupí-'omá> (腫ものができる)、<pír-'omá> (傷つく) などと用いられる。本文のような場合特に訳すこともないようだが、強いては(そこに)ある(川)とすべきなのであろう。
- 43) <náy> は <pét> と同様に「川」と訳しているが、北海道内においては <náy> が支流か沢に当筈。一般に沢の概念が当筈。ただし、樺太では <pét> の沢が多い、和語では「内」を仮借している。拙稿；<北海道地名の分類 ③～②> 河川周辺地名の項参照ありたい。
- 44) 札幌の平岸である。<píra-kes-i> で(崖の・尻の・処)で、上流から続いた崖の切れ端を指しているといわれる。山田秀三；前掲書、沙流川の上流にも <píra-kes> と呼ばれる地名がある。

北海道と東北地方の地名関連について

- 45) 美瑛の <píra> は <píra-'utur-'oma> が永田；前掲書にある原名となっている。<崖の・間に・ある> で何が <ある> が不明である。従って原地名とおぼしき <píra-'utur-'oma-náy> をここでは掲げておいた。
- 46) 空知の <píra> は、<píra-noshke-'oma-náy> (崖の・中に・ある・沢) であるが <noshke> は middle 或は center の意味で、樺太 Ainu は <noshkeke>, 千島 Ainu は <shinoshike> といっているが (まんなか) の意味である。又、full moon のことも <cúp-noshki> といっている。
- 47) 八雲にある <píra> は、<pón-píra-'oma-náy> という。<pon> は (小さい) 或は (子供) である。従来 <pón> そのものが訳されていたか、地形的地名は常に比較対照をもつもので、<pón> があれば <póro> が近くにあったとみてよい、従って <póro-píra-'oma-náy> も、この地方の地名として、かつて存在していたものと考え。拙稿；<北海道の地名分類①～⑥>、同；増毛町の地名解増毛の項など参照ありたい。
- 48) 新冠にある <píra> は <píra-kes-'oma-náy> (崖の・端に・ある・沢) で各れも沢を現わす形容と考えてよい。<kes> - foot of a mountain で山裾を <nupúrikes> といっている。
- 49) 新冠には更に <píra-ke-'oma-náy> がある。<píra-ke-'oma-náy> は (崖の・ところ・ある・沢) となる。<ke> は名詞或は名詞的語根に付いて <ところ> の意を添えている。
- 50) 静内の <píra-'utur-kús-náy> で <崖の・間を・通る・沢>, 永田は前掲書で <píra-'utur-kush-náy> で <両崖の間を流る川> としている。<píra-'utur> で両崖というのは主部にあたると考えやすいので誤訳といってよい。飽くまで <náy> が主部と考えねばなるまい。<kús> は to pass to go through のことで、「川が通る」「沢がつづいている」が中心である。樺太 Ainu は (すぐ通る) ことを意味し、目の前ることをいっている。通りすぎるは別に <sírakkari> や、横切るは <tomotúye> などの表現を用いてる。
- 51) 中川にある <píra> は <píra-pa-'oma-náy> (崖の・端 (に) ・ある・沢) となる。<pa> は、この場合 (端) である。<pa> は (湯気・煙・見つける) などにも用いられることがある。この他に a) 主物の複数, b) 目的物の複数, c) 敬語としての <pa> がある。金田一京助, 知里真志保；アイヌ語法概説, 岩波・知里真志保；アイヌ語法研究及び樺太庁博物館資料などによる。
- 52) 白糠にある <píra> は <píra-'un-náy> で (崖の・ある・沢) と訳す。<'un> は口語体で単数形, <'us> が複数形, 地名の中では <'un> はた

北海道と東北地方の地名関連について

だの存在, <'us> は群在を示す。普通は <'un> の前の名詞は主語を表らわす, 稀には不完全自動詞の <'un> が補語の役割を果すことがある。

- 53) この <píra> は, <píra-'utur-'oma-pét> で <pét> で終わっている。<píra> と <pet> の結合は, 知っている限りでは2ヶ所である。<pesh> の場合も同様である。<pét> のような大きな川には <píra> がないのだともいえまい。地形的条件としては <pét> より <náy> の方が <píra> と結び易い。しかし, 他の語法上の問題があるかも知れない。今のところ不明である。
- 54) 苫前の <píra> は <píra-étóko-'oma-náy> (崖の・端(に)・ある・沢) である。<étóko> は <pa> と同じ(端)である。ただ <pa> の端でなく, front, before の意味をふくんでいるとみてよい。従って, 崖の前にある沢と訳すのが適切なのかも知れない。
- 55) <'o-píra-'un-náy> の<'o> は(川尻)である。本来(尻)又は(陰部)をあらわすものとされている。知里; 上掲書及び拙稿; 北海道の地名分類②~③河川周辺地名にある。
- 56) 伊藤せいち, 伊藤公平; <かえらざる川> に常呂及び常呂川周辺の地名を詳しく研究している。
- 57) <wakka-píra> で(飲料水のある崖)赤平市の原名, (あかびら)
- 58) <tóy-píra> (潰崖), 札幌市豊平(とよひら)
- 59) <píra-kes> (崖の端) 48) 参照。札幌市平岸(ひらぎし), 赤平市平岸(ひらぎし)
- 60) 平取(びらとり) 31) 参照
- 61) <píra-ka> (崖の上), 更科; 上掲書によると <píra-ka-náy> という地名もあることから, 或は <píra-ka-náy> が原名であるかも知れない。日高の平賀(ひらが), 中頓別の平賀内(ひらがない)等がある。
- 62) <píra-'etu> (崖の先) 日高と別海にある地名
- 63) <'o-píra-'ush-pe> (川口に崖のある川) で, 小平薬(おびらしべ)としたが, のち小平(おびら)と改名, 苫前にある。
- 64) <wén-píra> (悪い崖), <wén> は何が悪いのか不明, 上平(うえひら)苫前郡にある。
- 65) <yuk-díra> (鹿の崖), 活平(かつひら)という。浦幌町にある。
- 66) <hure-píra> (悪い崖), 古平(ふるびら)という。
- 67) 安平(あびら) 29) 参照。
- 68) <'onne-píra> (老いた崖), 穩弥平(おんねびら) 雄別にある。
- 69) <píra-'utur-'oma-náy> で(崖の間を流れる川) 48) 参照, 平苫内(ひら

北海道と東北地方の地名関連について

とない) という。雄別にある。

70) 拙稿；北海道の地名分類④～⑥参照ありたい。

5

和語に於ける <ひら> は、Ainu 語の <píra> と同意解釈が出来るものと考えられるが、記録をみると、崖或は傾斜地よりも平地或は平坦地を指す場合の方が、より一般的であったことは否定出来ない。万葉¹⁾の <ひらには 小網指し渡し> の <ひら> は、平瀬の <ひら> で、緩やかな川の流を指しているものとみてよい。万葉には又枚或は片として扱ったものも少ない。後に <ひとひら> や <ひらひら> 等の擬音も是の当りに端緒があるものと思われる。源氏の梅枝には <好み書き給へるひらもあめり> とあるから木の葉や紙などの薄くて、平らなものを指している様だし、<屏風のひとひらたたまれるより> 平たいものを数える助詞として用いられている。方丈記の <さながらひらに倒れたるもあり> とは、形容動詞の役割を果し <たいら> な事を表わしているものと受取れる。近松の宵庚申の <ひらには……家来に持たせし山の芋> といい、<平椀> の略となっている。源平盛衰記にある <真実だにも ひらに渡りつくこと難かるべし> の <ひら> も <やすやす> の意味である。この他に <ひら> を用うるものをみると、名詞では「平足駄」「平謝」「平絲」「平押」「平織」「平御召」「平瓷」「平仮名」「平鼎」「扁鉦」「平釜」「平絹」「平銀」「平首」「壁錢」「平削」「平侍」「平皿」「平敷」「平芝」「平島」「平城」「平攻」「平象眼」「平袖」「平作」「平造」「平地」「平詰」「平手」「平年寄」「平土間」「平鍋」「平繡」「平場」「平袴」「平張」「平針」「平額」「平人」「平紐」「平舞台」「平蒔絵」「平舞」「平骨」「平麦」「平虫」「平目」「平目地」「平目粉」「平元給」「平盛」「平紋」「平門」「平胡籛」「平椀」「平緒」「平折敷」

北海道と東北地方の地名関連について

「平打」「平打紐」「平紘」「平紘帯」「平極」「平鞆」「平策」「平田」「平田船」「平屋」「平屋造」等である。動詞になって「ひらめかす」「ひらむ」等各れも平らな様であるとか、ひらたい事を指している。「平」を「片」或は「扁」につくる事は是の間の事情をよく示している。又、名詞の「開」や動詞の「ひらく」「ひらぶ」等も同系のものと考える事が出来る。しかし、古事記にある〈よもつひらさか〉は黄泉への境を指しているから、決して坦々の〈たいら〉とは解釈が出来ぬ様である。其の意味で記録を検討してみると、弥勒上生経賛平安初期点には〈世尊の足の跌—ひら—は脩く高く充ち満ちて、柔軟妙高なり〉とある。これも〈ひらたい〉ではない。更には岩手の気仙方言では〈あしのべら〉といい、秋田の方言でも〈あしのべら〉といい、津軽語彙によると〈あしのふえら〉というのも〈平ら〉ではなく〈傾斜〉を表わす〈ひら〉とみてよい。

殊に地名に於ける〈ひら〉は傾斜地を指すものが多い。盛岡でいう〈さかつひら〉は傾斜地の事であり、秋田の鹿角の〈さかべら〉も傾斜地である。山形の最上では〈ひしゃ〉が斜面の土地、奈良の吉野の〈ひったら〉が傾斜地、岩手の岩手郡の〈ひら〉は斜面、山形の最上の〈ひら〉は山腹、長野の松本の〈ひら〉は山の斜面、山梨の南巨摩の〈ひら〉は山の斜面、静岡の〈ひら〉は山の斜面、青森の三戸でいう〈ひらこ〉は崖阪の急な処、秋田の雄勝でいう〈ひらこ〉は山又は段丘上の傾斜地を指している。長野の北安曇でいう〈ひらっこ〉は緩傾斜地で、〈ひらっぱち〉が傾斜地となっている。静岡の駿東でいう〈ひらっぱち〉も山の斜面の土地を指している。群馬の利根では傾斜地の事を〈ひらま〉といい、長野の下水内では阪の事を〈へら〉、滋賀の栗太では山の裾や端の事を〈へらこ〉と謂う。長野の北安曇の〈へらっこ〉は〈ひらっこ〉の変訛で緩傾斜を指したものである。種子ヶ島の加計呂麻で〈ひらあ〉というとは阪の事である。

北海道と東北地方の地名関連について

名護の阪も <ふいら> といい、八重山でいう阪を表わす <かたいら> も同系のものと考えられる²⁾。松尾俊郎³⁾によると <ひら> は急斜面を意味し全国に分布していて、建築用語の <ひら> は切妻屋根の両方の流を指して、屋根の傾斜を表現しているとしている。その例として <平清水> <平井> <平出> <平井出> <平泉> を掲げ、斜面或は崖下の泉を表わしているとしている。確かに白山神社のある福井の平泉寺（へいせんじ）も傾斜下に泉があるし、転稼した岩手の平泉も地形的に酷似している。更に、平阪とあっても平坦な阪ではなく、峻しい阪を表わしたものであるという。松尾俊郎は <片平> や <帷子> 或は <帷>、<片山>、<片山岸> も崖や阪を表現したものとしている。<片平> は各地に分布する地名である。高知県須崎市の <帷子崎>、指宿の <鬼門平> なども例として掲げている。そして、<ひら> は Ainu 語説もあるが、全国的に分布している地名なのでと否定している。山中襄太の <地名語源辞典> に據ると <坂> <傾斜> <崖> の竟で <平山> <平岡> <平塚> <平尾> <平林> <平川> <三泉> <平取> <平野> <平出> <平賀> <平沢> <平浜> <枚方> <平方> 比良山> <比良崎> <高平> <鬼門平> などがあるとしている。そしてアツサム地方 Ahom 語で <崖> を <pira> であり、サンスクリット語でも <pāra> という岸崖で、朝鮮語でも <pirang> とはいえ崖のことであるとしている。又、満州語やツングース語でも <bira> といい河岸の意で <pira> に通ずるものがあるとしている。更に <六平> と書き <ムサカ> と呼んだり、<有平> と書き <アリサカ> と読む姓があるのは <平> が <坂> の仮借であったことを示しているとしている。和語の古語も <ヒラ> でなく <ピラ> であったとも付加している。

<片平> という地名も各地にある。仙台の片平は一方が市街地の平坦地へ、片方が広瀬川に臨む断崖である。<ヨモツヒラサカ> もこう

北海道と東北地方の地名関連について

した地形であったろうとも謂われる。

兎も角，地名における〈ひら〉は崖又は傾斜地を表わすものが多い。〈平〉の漢字を仮借しても崖，阪を表現するのか，中国の二，三の地名を検討してみた。例えば〈平山〉は諸々に在るが，山東聊城県の西南の平山は，土阜隆起如山というから平坦より，むしろ，崖つづき地への命名といってよい。〈平昌山〉は浙県に在って「与孟山前後相接」とある。〈平阿県〉は「在平阿山下即故城也」とある。〈平湖洞〉九域志によると大飛山有平湖洞，一夕風雨暴起，旦見此山聳峙，因名大飛とある。〈平靖関〉地理通釈に據ると此関因山為障。不営濠隍。故名平靖関。有大小石門。皆鑿山為道。とある。〈平楽県〉險惡尚少。以下則兩岸崖。中多碎石。水甚湍急とある。必ずしも地形から来る〈平〉ではないかも知れぬが〈平〉で平坦につながるものもある。日本の諸地方の〈ひら〉に就いて地形との関連から詳細な検討は今後を待たなければならぬが，主な〈平〉地名を掲げてみる。平泉（岩手）平泉（茨城県廉島）平出水（鹿児島）平出（福井県武生）平牛（新潟県糸魚川市）平田市・平田村（岐阜）平田村（福島）平田村（山形）平田（鈴鹿市）平田（丹後），岐阜の平湯峠，滋賀の比良山及比良山地，塩尻の平出，那珂湊市の平磯，大阪の枚岡，枚方市，北茨城の平瀧，上尾の平方，平塚市，平戸市，長野天竜の平岡，福岡の金辺峠にある平尾台，南河内の平尾及平尾峠，秋田の平鹿，青森の平賀町，千葉印旛の平賀，千葉東葛飾の平賀，新潟の平賀，佐久市の平賀，千葉の平川町，秋田仁賀保にある平沢，長崎の平戸島，田平平戸口，高知の平鍋，兵庫の平福，栃木の大平，宮城の大衡，大和郡山の平松，始良の池平，郡山の片平，中平，桑名の平方，新潟奥山庄の平木田，神奈川津久井の平井，東礪波の上平，草津市の平井，小諸の平，下平，平井，長崎の高平，宮崎椎葉の小屋の平，下の平，総社の平山，飯能の平松，和歌山市の平井，隠岐知夫里島の高平山，八王子の平山，箕面の平尾，出雲の井出平，京

北海道と東北地方の地名関連について

都の平池，北葛飾の平野，高野山の平野，市平，中津川市の蕨平，山口市の平野，会津若松の平沢，栃木市の平井，大分の月カ平，北九州の平尾，鈴鹿の平野，更埴の平久保，近江八幡の平林，鳥居平鶴岡の平方，等作為なしに掲げても実に多くの例を見付ける事が出来る。〈平〉は全国的地名であるとみてよい。

もともと〈ひら〉の〈ひ〉が傾斜地を表わす語幹で〈ら〉の助辞を添えたものとみる。山腹の緩やかな傾斜地を〈なら〉〈なる〉〈なる〉というが，これも〈な〉という語幹に〈ら〉を添えたものとみるからである。奈良も〈な〉の語幹と〈ら〉の助辞と〈す〉の語尾から構成されているとみる。〈ならず〉即ち平坦にする。平坦にして都市計画を策したのである。〈ならず〉が〈なら〉になり奈良を当てたものとみる。〈寧良〉〈奈路〉〈奈呂〉〈成〉〈鳴〉〈坪〉〈平〉の地名は全て同系とみる。従来〈坪〉は条里遺構の地名とすべきであるとされているが，本来〈ならず〉から来ている事を知らればなるまい。〈ならず〉以前の地形は勿論傾斜地から形成されていたものとみる事が出来る。柳田国男⁴⁾は〈の〉も傾斜を表現したものと考えている。〈の〉の語幹に〈ら〉を添えると〈のら〉即ち〈野良〉になるものとしている。是の〈野良〉は田圃でなく山の畑であった。岩手の雫石では〈山のノラ〉或は〈ノラ山〉といふば山腹の傾斜地を指している。同じように峰を〈ね〉といい，〈ねろ〉と後に〈ろ〉が添えられたものと同形である。〈みね〉の〈み〉は接頭語で峯となったものとみる。又，〈ね〉は〈根〉とも通ずるものと考えられる。このような一語一音一節が全ての地名に当筈のものと考えてはいないが，比較的数にして多かったものとみる。又，新村出の〈東亜語源原誌〉で琉球語の〈フライ〉は〈píra〉であるといい，伊波普猷の〈琉球戯曲辞典〉で〈sakufíra〉は〈サカヒラ〉の転訛であるとしている。戸上駒之助はその〈日本の民族〉で〈hilla〉

北海道と東北地方の地名関連について

(ヒラサカ)はハムリン山脈を超える坂であり、バビロンの地は <hilla> といひヒラサカはバビロン通行の坂のことを指したとしている。更に、三島敦雄によると<ヒラオカ>の<ヒラ>は、<ヒ>で倭人語で<火>、<ラ>は助辞で<ヒラオカ>は<火の岡>であるとしている。

ただ、既に指摘したように、<ひら>には別に<平坦>の意味もある。平坦は<たいら>から発している。古語の<たい>に接尾語の<ら>が付加したものである。<野良>の<ら>や<目良>の<ら>、<夜等>の<ら>と同形とみてよいであろう。<ひら>も<たいら>も漢字で<平>であったために、平坦地と傾斜地の地形的区分が出来なくなったものとみる。<たいら>も単に平坦地を表わす語ではなく、台地や山中の平坦地、段丘面、山間盆地などの限定された平坦地を指したものである。八幡平、淋代平などがある。

<たいら>の<たい>が<平>のみでなく、<岱>の漢字を用うようになって、地名は更に複雑になって来たものとみる。<岱>は本来中国五岳の東岳、泰山(太山)等の呼称で、孟子の<挾泰山以超北海>の句がある山岳名の事である。ところが、<たい>は別に又堆(たい)や袋(たい)、帯(たい)等が同音として登場して来るようになり、<だい>とも濁るようになる。天狗岱(てんぐだい)、大岱(おおだい)、大川岱(おおかわだい)等がある。<だい>は更に<代>にもなり、中代(ちゅうだい)、川代(せんだい)の地名となる。<だい>は<台>にもつくり、権吉台(ごんきちだい)、胡桃台(くるみだい)、湯上台(ゆあがりだい)、桑台(そうだい)、桑木台(くわのきだい)、物渡台(ぶつとうだい)、平台泥口(ひらだいさわぐち)、河童台(かっぱだい)、山王台(さんのうだい)、市川市の国府台も、もとは鴻、台か、高野台であろうと思われるが、<台>の地名は全国的なひろがりをもっている⁶⁾。是の事は松尾俊郎も指摘し、<たい>は<鯉

北海道と東北地方の地名関連について

> にもつくられているとしている。島根隠岐の西ノ島にある <鯉の鼻> の <鯛> や、長崎平戸島の北部 <鯉の鼻> の <鯛> も其れであるとしている。<たい> の <鯛> はもと平たい魚体 <平魚(たら)> から発したものでないかとしている。各れも <平坦> を表現したものである。

実は、是の <たい> は <ひら> と同様に、東国方言として定着してから Ainu 語の <táy> に変訛したのではないかと考えている。Ainu 語の <táy> は <森>、<林> の各れにも用いられている。<táy> は又 <ní-táy> としても用いられている。<ní> は <樹木> である。東北地方の北部では <……山> の変わりに <……森> を用うる事が多く、<táy> と関連しているとみる。地名の <森> は <杜> と関連し、神社の杜から発したものであるといわれるが、全ての森についてみては問題がある。岱と <táy> の関連については機会を改めて考えてみたい。岱と <táy> と森の三地名は何処かで繋がっているように思うのである。ところで <ひら> は全国的に分布しているから Ainu 語ではない。Ainu 語の <píra> とは発音上の偶然の一致であると見做されて来たのであるが、地形的特徴の一致や <pét>、<náy> <'omay> <'ush> が東北に残滓し <píra> が <ひら> でないとは謂えないものとする。<píra> <ひら> 共に和語であり Ainu 語なので、東北地方と北海道という地域差で言語流を妨げる必要はない。殊に、長崎の小長井地方の <ひら> の多量分布や Ahom 語の <píra> や満州・ツングース語の <bíra> や琉球語の <ヒラサカ> の例をみると、和語の古語も <ピラ> で、アイヌ語も <píra> であれば、一連の繋がりを想定しないわけにいかない。従ってアイヌ語で使用された <píra> はアイヌ語であり、和語で使われた <ヒラ> は和語であるとしかれない。が、東北と北海道という関連からみると、

北海道と東北地方の地名関連について

第二図表の如く展開して来た古語即ち西南言語が北進し、土着語であった Aínu 語と混合して東国方言を形成し、更に土着語であった Aínu 語は東国方言から分派して北進したものとみる。〈ひら〉は東国方言にて 〈píra〉の崖ではないが、傾斜地と崖の地形的な差異は混成し分派した時に同義から離れたものとみる。地形的にみて或は語法からみて全く異なった構造を持つ語だとは考えられない。

従って、〈ひら〉と〈píra〉が混存したと思われる東国方言の地域殊に東北地方三県，青森・秋田・岩手について〈píra〉の原形を検討すると同時に〈ひら〉の分布を考慮してみたいものと思う。東北三県は地名に関する限り東国方言と Aínu 語の坩堝であったものと信じて疑わない⁶⁾。

第二図表 ひら，たいらの年代的变化

	山間部の平坦地	傾斜地・阪
原型語幹	た い	ひ
語尾接尾語	ら	ら
混成	<táy>	<píra>
語形完成	たい+ら	ひ+ら
漢字仮借	平	平
共通化	平(地形混合)	
類似音・漢字・仮借	岱堆帯体袋	比良，枚，扁，衝
濁音変訛	岱台代鯛	<píra>
漢字による内容の共通化(現在)	岱，台，代，鯛，堆， 帯，体，袋，平	比良，枚，扁，衝， 比羅，日良，平，平 良，比楽

<註>

- 1) 万葉集一本文篇(塙書房)，万葉集古義，一廉持雅澄一國書刊行会
- 2) 橘正一；〈アイヌ語と東北方言との一致〉蝦夷往来第12に負うところが多い。
- 3) 松尾俊郎；〈山地の地形に基づく地名の若干〉駒沢地理6,7号より

北海道と東北地方の地名関連について

- 4) 柳田国男；〈地名の研究〉 角川
 5) これらに用いた地名は主として，南外村教育委員会：〈南外村誌〉 第4集及び三浦鉄郎；〈地名のはなし〉，柿崎隆興；〈郷土の地名〉 に拠った。
 6) 拙著；〈北海道の地名分類〉①～⑥にも述べてある。

6

青森，秋田，岩手三県に分布する 〈ひら〉 を地名形から分類してみると次表のようになる。

第三図表 〈ひら〉 の分類—東北3県—

大分類	地名	主な地域名，県（青・秋・岩）・市町村名	例数
大 平	大 平 〈'o-pira〉 〈táy-pira〉	〈青・鮫〉 〈岩・一関〉 〈岩・軽米〉 〈岩・平泉〉 〈岩・下閉伊〉 〈岩・新里〉 〈岩・江刺〉 〈岩・東磐井〉 〈青・三戸〉 〈岩・九戸〉 〈秋・太平〉 〈秋・上新城〉 〈秋・上井河〉 〈秋・内川〉 〈秋・繫〉 〈秋・河辺〉 〈秋・西目〉 〈秋・上浜〉 〈秋・上郷〉 〈秋・直根〉 〈秋・下郷〉 〈秋・青平〉 〈秋・石沢〉 〈秋・東滝沢〉 〈秋・西滝沢〉 〈秋・南内越〉 〈秋・北内越〉 〈秋・岩谷〉 〈秋・上大川内〉 〈秋・千屋〉 〈秋・大屋寺内〉 〈秋・山内〉 〈秋・川連〉 〈秋・西成瀬〉 〈秋・駒形〉 〈秋・皆瀬〉 〈秋・三関〉 〈秋・山田〉 〈秋・西馬音内〉 〈秋・明治〉 〈秋・軽井沢〉 〈秋・紫平〉 〈秋・鹿渡〉	43
	大 平 沢	〈秋・萱ヶ沢〉 〈秋・直根〉 〈秋・西滝沢〉 〈秋・岩谷〉 〈秋・大沢〉	5
	大 平 山	〈岩・中里〉 〈秋・象潟〉 〈秋・院内〉 〈秋・西馬音内〉	4
	大 平 下	〈秋・生保内〉 〈秋・仙道〉 〈秋・檜山〉 〈秋・鹿渡〉	4

北海道と東北地方の地名関連について

	大平上	<秋・滝沢> <秋・西滝沢>	2
	下大平	<秋・玉米> <秋・直根> <秋・下郷>	3
	太平	<秋・太平>	1
	大平口	<秋・西馬音内>	1
	大平沢頭	<秋・萱ヶ沢>	1
	大平岩	<秋・大阿仁>	1
	大平岩淵	<秋・大阿仁>	1
	大平金屎	<秋・西滝沢>	1
	大平道ノ下	<秋・直根>	1
	中大平	<秋・下郷>	1
	松館大平	<秋・岩瀬>	1
	大平岱	<秋・常盤>	1
小平 <'o-pira>	小平	<秋・富田> <秋・西馬音内> <青・上北> <青・六戸>	4
	小平沢	<秋・岩見三内>	1
	小平岱	<秋・岩見三内>	1
	小平岱坂下	<秋・岩見三内>	1
	イシノ小平岱	<秋・岩見三内>	1
	戸平	<秋・三梨>	1
	小平町	<秋・前田>	1
平岡	平岡	<青・船沢> <青・藤代> <青・石川> <青・青森> <青・新城> <青・藤崎>	6
	東平岡	<青・弘前> <青・藤崎>	2
	西平岡	<青・弘前>	1
	北平岡	<青・藤崎>	1
	中平岡	<青・弘前>	1
平山	平山	<青・弘前> <青・千年> <青・東日屋> > <青・船沢> <岩・大船渡> <岩・	7

北海道と東北地方の地名関連について

		東和> <青・十和田>	
	西平山	<青・千年> <秋・南樺岡>	2
	東平山	<青・千年>	1
	中平山	<青・千年>	1
	平山小路	<岩・上米内>	1
	切ノ平山	<秋・醍醐>	1
	日陰平山	<秋・醍醐>	1
	戸平山	<秋・三関> <秋・須川>	2
	段ノ平山	<秋・南樺岡>	1
平野 <pira-nu>	平野	<青・藤代> <青・沢山> <青・鶴田>	3
	平埜台	<秋・弁天>	1
	平野場	<青・名川> <青・三戸>	2
	黒石野平	<岩・上田>	1
	平場	<秋・船岡> <秋・稲葉> <秋・皆瀬> <岩・東磐井>	4
	下黒石野平	<岩・上田>	1
	上野平	<秋・立石>	1
	平場喜兵衛森	<秋・弁天>	1
	馬場平	<青・玉山>	1
	平場山	<秋・皆瀬>	1
	中羽場平	<秋・皆瀬>	1
	野平	<秋・里見>	1
平沢 <pira-náy>	平沢	<岩・久慈> <秋・繫> <秋・平沢> <秋・南樺岡> <秋・大阿仁> <秋・八森> <岩・下閉伊> <秋・豊川>	8
	小平沢	<岩・江刈> <岩・紫波>	2
	内平	<秋・金浦>	1
	奥沢内平	<秋・小出>	1

北海道と東北地方の地名関連について

	平ノ沢	<秋・岩田川> <秋・金沢> <秋・大沢>	3
	大平沢	<秋・繫>	1
	平沢尻	<秋・繫>	1
	平ヶ沢	<秋・上大川内>	1
	上平沢	<秋・浅舞> <岩・紫波>	2
	中平沢	<秋・浅舞>	1
	下平沢	<秋・浅舞>	1
	平内	<青・階上> <青・平内> <岩・種市>	3
	沢内平	<秋・上郷> <秋・小出>	2
	平台沢口	<秋・豊川>	1
平 <pira>	平	<岩・大船渡> <岩・九戸>	4
	上平	<岩・大船渡> <秋・上郷> <秋・花輪> > <秋・前田>	4
	下平	<青・階上> <岩・大船渡> <秋・秋ノ宮> <岩・下閉伊>	4
	中平	<岩・水沢> <青・八戸>	2
	平ノ下	<秋・飯田川> <秋・馬場目> <秋・荒沢> <秋・上郷> <秋・小出> <秋・直根> <秋・下郷> <秋・大沢> <秋・院内> <秋・明治>	10
	平ノ脇	<秋・八田> <秋・西滝沢> <秋・北内越> <秋・荒川> <秋・前田> <秋・添川>	6
	横平	<秋・皆瀬> <秋・紫平> <秋・十二所> > <秋・紫波>	4
	上ノ平	<秋・河辺> <秋・矢島> <秋・上郷> <秋・直根>	4
	中ノ平	<秋・上郷> <秋・直根> <秋・成瀬>	3
	奥平部	<青・東津軽>	1

北海道と東北地方の地名関連について

長 平	<青・西津軽> <秋・東成瀬>	2
向 ノ 平	<秋・直根>	1
前 平	<秋・東滝沢> <秋・古館> <秋・西成瀬> <秋・三梨> <秋・小野> <秋・秋ノ宮> <秋・尾去沢> <秋・花輪> <秋・軽井沢> <秋・藤琴> <秋・仙道> <秋・毛馬内>	12
向 平	<秋・上大川内> <秋・大阿仁>	2
向 ノ 平	<秋・院内>	2
下 ノ 平 通	<秋・強首>	1
上 ノ 平 通	<秋・強首>	1
下 平 城	<秋・川連>	1
上 平 城	<秋・川連>	1
中 平 城	<秋・川連>	1
平 平 城	<秋・川連>	1
上 ノ 山 平	<秋・東成瀬>	1
平 城	<秋・小野> <秋・白岩>	2
独 活 平	<秋・上小阿仁>	1
平 町	<青・飯詰>	1
脇 平	<秋・面瀉>	1
平 賀	<青・平賀> <岩・下厨川>	2
平 賀 新 田	<岩・下厨川>	1
平 ノ 尻	<秋・上浜>	1
平 鹿	<秋・増田>	1
平鹿大堰下夕	<秋・東成瀬>	1
在城平鹿端	<秋・増田>	1
砂子沢ノ内 右ノ平	<秋・荒川>	1
平 川	<青・平内>	1

北海道と東北地方の地名関連について

	川原平	<青・中津軽>	1
	長瀨平	<秋・東成瀬>	1
平井 <pire-i>	平井	<青・五所川原> <岩・下閉伊>	2
	鶴平	<秋・三梨>	1
	上平井	<青・五所川原>	1
	中平井	<青・五所川原>	1
	下平井	<青・五所川原>	1
	清水平	<秋・金浦> <秋・直根>	2
	泉ヶ平	<秋・直根> <秋・青平>	2
	水平	<秋・荒川> <秋・中川> <秋・南橋岡> <秋・須川>	4
	平清水新町	<秋・山内>	1
	平清水	<秋・横沢> <秋・湯沢> <秋・須川> <秋・里見> <岩・五山> <岩・盛岡>	6
	大滝平	<青・青森>	1
	桶清水平	<秋・東成瀬>	1
	平泉	<岩・平泉> <秋・塙川>	2
	洗平	<青・六戸>	1
	平滝	<青・木造>	1
	平井沢	<秋・院内>	1
	水抜平海道下	<秋・土川>	1
平田 <pira-tá>	平田	<青・飯詰> <岩・釜石>	2
	平田沢	<秋・道川>	1
	平畑	<青・三沢> <岩・高田> <秋・大沢>	3
	平沼	<青・六ヶ所>	1
	平田尻	<秋・富田> <秋・亀田>	2
	沼ノ平	<秋・院内> <秋・直根>	2

北海道と東北地方の地名関連について

	畑 平	<秋・院内>	1
	平 倉	<青・遠野>	1
	新 田 平	<岩・花泉>	1
	平 新 田	<青・中津軽>	1
	田 代 平	<青・東津軽>	1
	源 田 平	<秋・紫平>	1
	平 里	<秋・前田>	1
片 平	片 平	<秋・荒沢> <秋・象潟> <秋・鹿渡>	3
	片 平 下	<秋・荒沢>	1
	帷 平 小 路	<岩・上田>	1
	源四郎沢南 片平	<秋・道川>	1
	小坂片平山	<秋・強首>	1
	片 平 館	<秋・前田>	1
石 平	石 平	<秋・小出> <秋・玉米> <秋・下郷> <秋・北内越>	4
	平 石	<秋・金浦> <秋・平沢> <秋・鮎川>	3
	平 石 谷 地	<秋・鮎川>	1
	平 石 下 段	<秋・山内>	1
	平 石 上 段	<秋・山内>	1
	蛇 石 平	<秋・荒川>	1
日 影 平	日 陰 平	<秋・矢島> <秋・坂之下> <秋・上郷> <秋・内山> <秋・西馬音内>	5
	西間ヶ沢ノ 内日陰比羅	<秋・東滝沢>	1
	日陰日良山	<秋・東滝沢>	1
	上 日 陰 平	<秋・南内越>	1
	中 日 陰 平	<秋・南内越>	1
	下 日 陰 平	<秋・南内越>	1

北海道と東北地方の地名関連について

	ヒナタ平	<秋・神宮寺>	1
	日蔭平山	<秋・醍醐>	1
	日景平	<秋・駒形>	1
	影平	<秋・秋宮>	1
(方向) 平	北平	<秋・三梨> <秋・十二所>	2
	東平	<秋・小野>	1
	大沢東平	<秋・荒川>	1
	西平	<秋・上郷> <秋・小出> <秋・阿仁合> <岩・一関>	4
	三ツ森西平	<秋・神宮寺>	1
	兀ノ下南平	<秋・道川>	1
	賜沢北平	<秋・道川>	1
	巡り南平	<秋・道川>	1
	源四郎沢南 片平	<秋・道川>	1
	獅子山南平	<秋・道川>	1
	梨木台北平	<秋・道川>	1
	坂ノ下北平	<秋・道川>	1
	巡り北平	<秋・道川>	1
	下繫北平	<秋・道川>	1
	三ツ森東平	<秋・神宮寺>	1
	羽後北平	<秋・三漕>	1
(森) 平	平林	<秋・須川> <秋・秋ノ宮> <岩・花巻> <秋・院内> <秋・弁天> <秋・大 屋寺内> <秋・稲庭> <秋・三梨>	8
	五林平	<青・北津軽>	1
	平林長根	<秋・三梨>	1
	平場喜兵衛森	<秋・弁天>	1

北海道と東北地方の地名関連について

	戊 平 林	<秋・荒川>	1
	平 森	<秋・萱ヶ沢> <秋・黒川>	2
	平 ラ 林	<秋・須川>	1
	大 森 平	<秋・上郷>	1
	森 ノ 平	<秋・小出>	1
	三ツ森東平	<秋・神宮寺>	1
	三ツ森西平	<秋・神宮寺>	1
(木)	平		
	桂 平 岩	<青・中津軽>	1
	枯 木 平	<青・中津軽>	1
	根 木 平	<秋・檜山>	1
	杉 平	<秋・里見>	1
	平 良 木	<岩・花巻>	1
	槻 木 平	<岩・一関>	1
	平 柳	<秋・醍醐>	1
	紅 葉 平	<秋・皆瀬>	1
	松 平	<秋・弁天> <秋・小野> <秋・矢立>	3
	栩 ケ 平	<秋・大沢>	1
	檜 木 平	<秋・土川>	1
	梨ノ木台北平	<秋・道川>	1
	間木ノ平	<秋・院内>	1
	梨 木 平	<青・八戸>	1
	藤 平	<秋・皆瀬>	1
	柿 木 平	<岩・盛岡>	1
	松 木 平	<岩・上米内> <秋・土川> <青・弘前>	3
	柏 木 平	<岩・葛巻> <岩・上閉伊>	2
	大 杉 平	<青・糠塚> <青・八戸>	2

北海道と東北地方の地名関連について

	梨 平	<秋・下北手>	1
	松 ケ 平	<秋・矢島> <秋・荒川>	2
	杉 ノ 平	<秋・上浜> <秋・中里>	2
	桐 平	<秋・上郷> <秋・六郷>	2
	ウルシ 平	<秋・小出>	1
	上間木ノ平	<秋・院内>	1
(草) 平	菖 蒲 平	<岩・葛巻>	1
	落 平	<秋・矢島>	1
	石 落 平	<秋・川連>	1
	上 虎 杖 平	<秋・院内>	1
	下 虎 杖 平	<秋・院内>	1
	葛 平	<秋・院内>	1
	薊 平	<秋・院内> <秋・青平> <秋・花館>	3
	繁 山 田 平	<秋・荒川>	1
	菅 ノ 平	<秋・西成瀬>	1
	紫 蕨 平	<秋・三梨>	1
	岩 多 羅 平	<秋・西馬音内>	1
	小 瓜 平	<秋・西馬音内>	1
	瓜 平	<秋・西馬音内>	1
	葛 平 沢	<秋・軽井沢>	1
	志 戸 平	<岩・花巻>	1
	菜 平 沢	<秋・里見>	1
	菅 平	<秋・中川>	1
	岩 菅 平	<秋・上郷>	1
	葛 子 平	<青・三戸>	1
	瓜 平 山	<秋・軽井沢>	1
	石 蕨 平	<青・むつ>	1

北海道と東北地方の地名関連について

赤平 <wakka-pira>	赤平	<岩・上田> <岩・下厨川> <岩・葛巻> <秋・下北手> 秋・山内 <秋・中川> <秋・宮川>	7
	赤平貝沼	<秋・南檜岡>	1
	赤平沢	<秋・南檜岡> <秋・山内> <秋・北内越>	3
	赤平台野	<秋・南檜岡>	1
	赤平境	<秋・富田>	1
	赤平後野	<秋・南檜岡>	1
	赤平六郎沢	<秋・南檜岡>	1
	赤平平家	<秋・南檜岡>	1
	赤平大道東	<秋・南檜岡>	1
(浜) 平	小船渡平	<青・八戸>	1
	平良ヶ崎	<青・南部>	1
	平船	<岩・葛巻> <岩・一戸>	2
	平津戸	<岩・川井>	1
	浜平	<秋・松ヶ崎> <秋・道川>	2
(人物) 平	北蛭川前平	<秋・東成瀬> <秋・弁天>	2
	行人平	<岩・紫波>	1
	長作平	<秋・院内>	1
	伯耆平	<秋・繫>	1
	丹後平	<青・八戸>	1
	源四郎沢南片平	<秋・道川>	1
	養四郎岱平	<秋・荒川>	1
	久七平	<秋・荒川>	1
	後家平	<秋・荒川>	1
	妹平	<秋・山内>	1

北海道と東北地方の地名関連について

	平場喜兵工森	<秋・弁天>	1
	弾 正 平	<秋・皆瀬>	1
	四 人 平	<秋・西馬音内>	1
	善右衛門平	<秋・毛馬内>	1
(動物) 平	鴨 平	<青・八戸>	1
	鮫 平	<秋・元町>	1
	狐 平	<秋・上郷> <秋・上大野> <秋・仙道>	3
	獅子南平	<秋・道川>	1
	戌平下多岱	<秋・荒川>	1
	戌 平 林	<秋・荒川>	1
	戌平家ノ前	<秋・荒川>	1
	戌 平 岱	<秋・荒川>	1
	孤沢北平	<秋・鹿渡>	1
	猿 ガ 平	<青・三戸>	1
	鳶 ケ 平	<岩・紫波>	1
	馬 場 平	<青・玉山>	1
	猿 平	<秋・三梨>	1
	猿 子 平	<秋・三梨>	1
	獅 子 平	<秋・北内越>	1
(枚) 平	七 平	<青・中里>	1
	一 枚 平	<秋・矢島> <秋・小出>	2
	板 平	<秋・矢島>	1
	碁 磬 平	<秋・上郷>	1
	三 ノ 平	<秋・刈和野> <秋・金沢>	2
	壺 枚 平	<秋・大沢>	1
	五 枚 平	<秋・院内> <秋・峰吉川> <秋・荒川>	3
	十 二 平	<秋・青平>	1

北海道と東北地方の地名関連について

(信仰) 平	山 王 平	<秋・上川沿>	1
	天 摩 平	<青・八戸>	1
	不 動 ヶ 平	<秋・荒沢> <秋・木在>	2
	天 狗 平	<秋・小出> <秋・山内>	2
	三 嶽 平	<秋・小出> <秋・院内>	2
	梵 天 平	<秋・直根>	1
	八 幡 平	<秋・金沢>	1
	薬師堂ノ内 堤平	<秋・荒川>	1
	宮 田 平	<秋・三関>	1
	薬 師 平	<秋・西成瀬>	1
	御 嶽 前 平	<秋・西馬音内>	1
	明 神 平	<青・横浜>	1
	白 神 平	<青・西津軽>	1
	大 嶽 平	<秋・八森> <秋・皆瀬>	2
	御 嶽 平	<秋・坂之下>	1
平 館	平 館	<岩・西根> <青・東津軽>	2
	館 ノ 平	<秋・富根>	1
	館 平	<秋・西馬音内> <秋・皆瀬> <秋・西成瀬> <秋・小出>	4
	片 平 館	<秋・前田>	1
	平ノ館下道 越起上	<秋・東雲>	1
	平ノ館下起上	<秋・東雲>	1
	古 館	<秋・醍醐>	1
平 形	扇 平	<秋・尾去沢>	1
	平 形	<秋・南檜岡> <秋・飯田川>	2
	平形中島	<秋・南檜岡>	1
平 張	上 平 張	<秋・檜山>	1

北海道と東北地方の地名関連について

	下 平 張	<秋・檜山>	1
	平 張	<秋・檜山>	1
谷 地 平 <yachi-pira>	大 沼 平	<青・十和田>	1
	蛇 沼 大 平	<青・三戸>	1
	沼 之 平	<秋・金岡>	1
	谷 地 平	<秋・皆瀬> <秋・直根>	2
	徳瀬谷地平	<秋・荒川>	1
	谷地平ノ台	<秋・下郷>	1
	谷地平ノ根	<秋・下郷>	1
	大 谷 地 平	<秋・直根>	1
	風 平	風 平	<秋・明治> <秋・角間川> <秋・大尾寺内> <秋・道川>
平 中 島	平 中 島	<秋・角間川>	1
	平 形 中 島	<秋・南檜岡>	1
高 平 <pira-tay>	平 台	<秋・下浜>	1
	平 代	<秋・峰吉川>	1
	米 山 平	<秋・荒川>	1
	立 平	<秋・大川西根>	1
	高 市 平	<秋・田沢>	1
	高 平	<秋・長信田> <秋・青平>	2
	台 平	<秋・西馬音内>	1
	小 山 平	<秋・毛間内>	1
	高 野 平	<秋・山田>	1
	烏 帽 子 平	<秋・皆瀬>	1
	嶽平地獄沢	<秋・東成瀬>	1
	小五里岱平	<秋・東成瀬>	1
小 屋 平	小 屋 平	<秋・荒沢>	1

北海道と東北地方の地名関連について

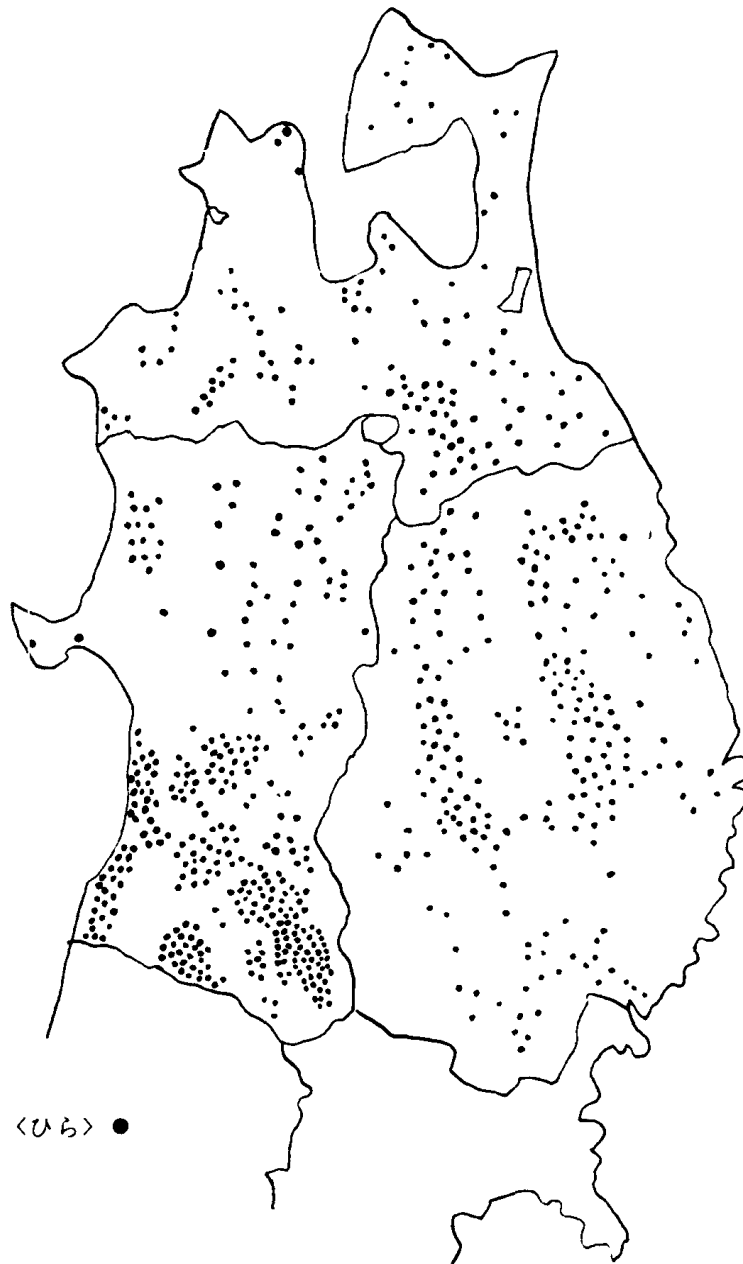
	荒屋平	<青・上北>	1
	根小平	<秋・沢目>	1
	番屋平	<秋・明治>	1
	徳瀬役処岱平	<秋・荒川>	1
その他	小金平	<秋・小出>	1
	鏡ヶ平	<秋・直根>	1
	角間ヶ平	<秋・直根>	1
	畑沢青平	<秋・刈和野>	1
	大倉見大日平	<秋・生保内>	1
	青平	<秋・直根> <秋・青平>	2
	久慈平	<岩・九戸>	1
	祭時平	<岩・一関>	1
	甲地平	<岩・下閉伊>	1
	裾野平	<青・中津軽>	1
	勝平	<秋・上岩川>	1
	豊作平	<秋・西馬音内>	1
	アサ平	<秋・大阿仁>	1
	関根平	<秋・檜山>	1
	根ノ平	<秋・皆瀬>	1
	殿平	<秋・上浜>	1
	遠平	<秋・皆瀬>	1
	下作平	<秋・西成瀬>	1
	新平	<秋・東成瀬>	1
	坂比平	<秋・尾去沢>	1
	大地平	<秋・尾去沢>	1
	真那坂平	<秋・醍醐>	1

北海道と東北地方の地名関連について

伐平滝ノ沢	<秋・荒川>	1
需平沢	<秋・道川>	1
毛抜平	<秋・山内>	1
明平	<秋・生保内>	1
欠平	<秋・生保内>	1
平操	<秋・北内越>	1
サス平	<秋・青平> <秋・上郷>	2
ガザ平	<秋・青平>	1
指平	<秋・上郷>	1
青平下	<秋・坂之下>	1
行平	<秋・矢島>	1
氷ヶ平	<秋・矢島>	1
相ヶ平	<秋・矢島>	1
這平	<秋・船岡>	1
種平	<秋・種平>	1
平床	<秋・戸賀>	1
熊手平	<秋・脇川>	1
平毛沢	<秋・小又>	1
平糠	<岩・一戸>	1
平笠	<岩・西根町>	1
兼平	<青・岩木>	1

<ひら> と誦する東北三県の地名を分類してみたが多くの問題をかかえているような気がする。譬えば、<崖> を表わす古語の <ハマ> <ハバ> <ママ> <ババ> 等で地名分析すると、<馬場の平> は <馬場> と無関係の「崖のある傾斜地」とすべきなのかも知れない。又、<角間平> の <角間> は、<河曲の曲流地、殊に山間のかくれ

北海道と東北地方の地名関連について

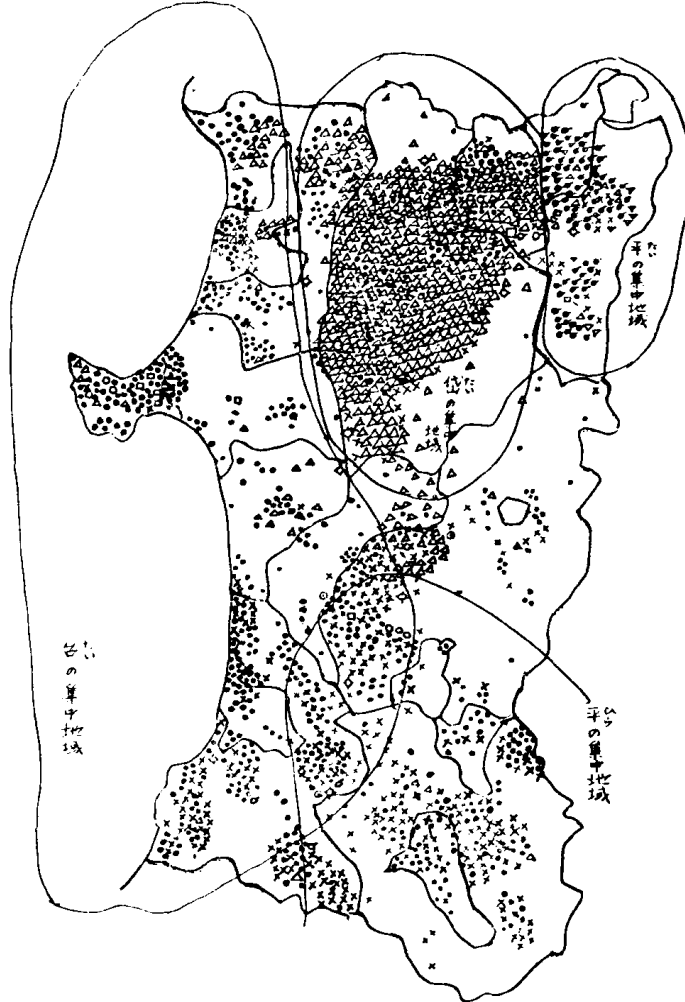


※4図

た地点> に名付けられるので、「穿入蛇行のかけにある傾斜地」の分類をしなければならぬかも知れない。その他、<平倉> の<倉> は、赤倉山の<倉> だとすると、古語で謂うと<岩> <崖> <岩場> となり「岩場のある傾斜地」なのかも知れない。<岱> も鈴木竜司によると<台> よりも目出たく祝事の有った地の意義が含まれているとす

北海道と東北地方の地名関連について

秋田県に於けるタイ・ダイ・タエ・ヒラなどの地名分布 (第5図)



- | | | | | | | | | | |
|---------|---|---------|---|-------|---|-------|---|-------|---|
| 台<たい> | ● | 岱<たい> | △ | 平<たい> | ● | 代<たい> | ○ | 堆<たい> | + |
| 台<だいたい> | □ | 岱<だいたい> | ○ | 平<たえ> | ▽ | 袋<たい> | * | 体<たい> | ◎ |
| 台<たえ> | ■ | 岱<たえ> | ▼ | 平<ひら> | × | | | | |
| 台<だえ> | ▲ | | | 平<へい> | ◇ | | | | |

ると、一語一語の地名に就いて検討を更に要するものと考えている。

既に指摘したように、是の <ひら> が北進して <pira> になったものとみる。<pira> の分布量の多い事も指摘したが、東北三県に在る <ひら> は更に多量である。<pira> の母胎である東国方言の <ひら> は地名量が多くても当然である。

更に <ひら> の分布を図化してみると、(第4図参照) 各れも標高

北海道と東北地方の地名関連について

10m 以上に定着している事を知る。〈ひら〉が〈傾斜地〉で、決して平坦地の表現でないことを知る。秋田県一部の地方に〈ひら〉が集中しているのは興味ある。秋田県について見てみると、〈ひら〉〈たい〉の分布は各々地域によって差がある事が知れる。(第5図参照)〈平(たい)〉及び〈岱〉は県北に集中し、〈台〉は主として海岸地域に散在している。〈ひら〉は全地域に散在しているが、特に県南に集中地域がある。是の分布図から言語限の拡大について論じる事は至難であるが、西南日本語の北進と北方系言語の要徴ではなかったろうかと考えられる。斑状文化地域であったとか、二重言語地域であったという推定は斯様な地名差からも推定出来るものと思われる。

7

Ainu 語と日本語が親族関係にある蓋然性の強いことが最近説かれている。服部四郎は同系であるとしても、7,000~10,000年まで溯上しなければならぬと説いている。若し、Ainu 語と日本語が、その音韻から同系であるとする、同系の証査となる類似の語彙を見付け出す事が出来るのではないかと、筆者は既に Ainu 語の〈tomari〉〈yachi〉〈shuma〉と日本語の〈泊〉、〈谷地〉、〈岩島〉等の対蹠関連を追求して来た。又、従来 Ainu 語であると断定すらされて来た東北地方の〈náy〉や〈pét〉も、日本語の一部を構成する語彙ではないかと謂う疑問すら投げかけて来た。

東北地方の地名の中には〈沼宮内〉〈毛馬内〉〈生保内〉〈今別〉〈原別〉等 Ainu 語とおぼしき地名が無数に存在している。従って本州東北部には Ainu 語系の民族が住んでいたとみるべきであろうと謂われ、かつ紀記に登場する蝦夷なる記載も、毛人の記録も Ainu 語系民族の名称と考えてよいであろうとされている。史的な範囲での開拓北限が知られているが、(多賀柵・大室駅・平才駅・雄勝城・由理柵・出羽

柵) 飽くまでも、中央政策の東北支配であって、言語及文化についての常民の北限とは直接関係がなかったものとみる。従って、東北各地には蝦夷の文化と日本人文化が斑状に存在していたものとみる。(地名数量からいって、秋田地方が両文化の交錯地域の中心とみるが)、この斑状文化地域では、当然 Ainu 語と日本語が交錯し二重言語地域を構成したものとみる。東国方言が西南地域と差異があるのは是の斑状文化地域であることに拠るものである。その意味で日本語と Ainu 語に共通の語彙があるとしても不思議でない。否、各れも日本語の範疇として考えるなら Ainu 語は日本語の方言であったとしてよい。是の例を <ひら> と <pira> の共通性から其の分布を追求してみたいものと考えたのである。

<ひら> も <pira> も漢字の仮借で <平> を殆んど当筈めているが、語源では異質なものとされている。諸説はあるが、地名の <ひら> は傾斜地或は阪を指しているものが多い。<ひら> の原型語幹は <ひ> で阪を表わしている。<ら> は語尾で接尾語となる。動詞になって <ひらく>に通ずる。それは奈良の <なら> と同じで、<ならす> から来ているものとみなされている。古事記の <よもつひらさか> の <ひら> も全く同様な意解が出来るものと考えられる。この <ひら> 地名の分布をみてみると、平田・平湯(岐阜)比良(滋賀)平岡(長野)平川(千葉)平塚市、平戸・田平(長崎)平鍋(高知)平福(兵庫)大平(栃木)と東北諸県にあって日本全域にある。従って Ainu 語ではなく日本語だとするのである。Ainu 語の <pira> は崖と訳している。<'áspira> と謂えば <断崖> である。地形からみると <岩石の崖> や <兀た崖> などの差異がないため単なる普通名詞の扱いを超えて訳されることが屢々である。勿論 <傾斜地> や <阪> にも用うる。日本語の <ひら> と差がない。Ainu 語では <pi> も <bi> も <hi> も同音扱いするので、発音する時には <ピラ> と謂っ

北海道と東北地方の地名関連について

たり <ピラ> といったり <ヒラ> といったりする。Ainu 語には <píra> の他に <pešh> の同義語がある。Ainu 語に 2 通の表現があるのは、其の分布からみると <píra> が北海道全域 <pešh> は主として道東、千島に涉っていて、<píra> が移入語 <pešh> が本来の北方系 Ainu 語とする事によって、<píra> が移入語で当然 <ひら> と結びついたとみるべきである。殊に、ある時代東北地方へ北上した西南日本語と北方圏の諸語とが交錯した地域、それが東北地方で、両地域の地名の母胎地とみるのである。

斑状言語地帯であり二重言語生活をしていた東北地方には、日本語と Ainu 語に跨る地名が無数に段淬したものであると思われる。いくつかの疑念はあるが、<píra> を中心として二重言語当時の地名を想定したのである。

(大平・táy-píra・ó-píra) (大平岱・'o-píra-táy) (小平・ó-píra) (小平沢・ó-píra-náy) (戸平・tó-píra) (平埜台・píra-nú-táy) (平場・píra-pa) (野平・nu-píra) (内平・náy-píra) (平・píra) (上平・wén-píra) (平鹿・píra-ka) (平賀・píra-ka) (平ノ尻・píra-nu-shir) (蕨平・wrapi-píra) (赤平・wakka-píra) (猿平・sar-píra) (谷地平・yachi-píra) (大谷地平・óho-yachi-píra) (台平・táy-píra) 等がある。これらの内実際に北海道にある地名は (小平) (上平) (蕨台) (谷地) (大谷地) 等で東北地名と同積出来る。東北三県の <平> のつく地名約 600 の内疑念がもたれるものが 1/3 ある。又、当然二重言語地帯では両語から解釈されるべき地名であって然るべきである。それを Ainu 語だからといって地名解釈を忌避することがあってならぬ様に思うのである。<ひら> は日本語であり、その派生とみられる Ainu 語の <píra> も語源的には日本語であるとみることが出来る。但し一旦分派して北海道・樺太の Ainu 民族が用いた <píra> は Ainu 語として用いられ、それは日本語ではない。

北海道と東北地方の地名関連について

<ひら> は又、<平坦地> の意味にも用いられた。所謂<たいら> である。<たい> の語幹に <ら> の語尾が付いたもので漢字で、<ひら> と同じ <平> の漢字を嵌めたときに、平坦地と傾斜地の区別がつかなくなったものとみる事が出来る。<たいら> が <平> のみでなく <岱> の字を用いるようになって、地名は更に複雑になって来た。岱の字は本来中国五岳の東岳・泰山の呼称である。岱は <代> を生み袋まで <袋> として扱うようになる。同音であるということで、<堆> や <帯>・<体> が登場し、やがて <だい> と濁るようになる。<天狗岱> <大岱> <中代> <川代> <胡桃台> <桑台> <物渡台> となる。西南日本では <ひらたい魚体> の <平魚たら> から <鯛の鼻> などの地名となっている。星の <たい> も <ひら> と同じように北進して Ainu 語の <táy> となったものとみる。Ainu 語の <táy> は <森> で、和名の <杜> と直接関連のない地名が派生したものとみる、斯様に東北地方には <ひら> <たい> などという地名が Ainu 語の同音同義となって残滓していると考えられる。

この小論を亡き大和英成師に捧げます。顧みますと、廃科寸前の地理学科を再興し、駒沢地理の伝統を遵守し、私どものために尽瘁下された御志を忘れる事が出来ません。殊に聊か拙き才分の私などは、先生の学弟の名を辱しめた事が多く悔恨いたしております。

同時に、彼の実なくして徒らに名を擁することをも賤みなされ、譬名は埋れても実を養う事成された先生の思召を終生後凋の節として肝に銘じます。在天の霊に謹んで捧げます。